Father～父親達の娘愛～

(TADA)

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

この物語は親バカなファーザーズと知り合ってしまった苦労人・奥沢美咲の物語である

目　次

Ｆａｔｈｅｒ～父親達の娘愛～ ―― 1
親バカパラダイス～親バカだらけの商店街～ ―― 10
娘達の戦い～商店街からの脱出～（前編） ―― 21
娘達の戦い～商店街からの脱出～（後編） ―― 31
美咲、未知との遭遇～パパ達の同級生～ ―― 43
おくさわけ！～終末特異一家「奥沢家」～ ―― 49
涙のスマイルドーター～決戦は体育祭～ ―― 51
父と求めて～モンスターハンター～ ―― 57
娘達の戦い～あの父親を止めるために～ ―― 65

Ｆａｔｈｅｒ～父親達の娘愛～

奥沢美咲は苦労人である。

同じクラスの弦巻こころにバイト中にきたクマの着ぐるみの中の人としてハロー、ハッピーワールド!というガールズバンドでも苦労はしているが、そっちはまだ楽しめるレベルの苦労だった。

美咲の苦労の源は主に実の父親とその友人達だった。

美咲の父親とその友人達は娘大好きのドタコン集団だった。そして自然なキチ集団である。父親に連れ回されることが多く、そんな愉快な集団に囲まれて育った美咲はそれらを反面教師として常識人として育った。常識人として妹に道を踏み外させてはいけないと思って、美咲は率先して父親の被害を自分が被るようにした。

それを父親が「父離れできない可愛い娘」というアルティメット勘違いによってキチ集団と関わることが増えて、さらに美咲の心労は増大した。

父親には謎が多い。何より仕事が謎である。美咲が物心ついた時にはほとんど家にいて、家事をしていた。幼稚園の頃に美咲が「お母さんはどこに行ったの?」という問いに対して遠い目をしながら「遠くに行ってしまったんだよ」と呟いた。

翌日、美咲が旅行から帰って来た母親にそのことを告げると父親は庭の大木から逆さ吊りにされた。

そんな父親だが毎年の正月にどう見てもカタギな方々には思えない強面な男性が家に集まって来て、丁重な礼をして帰っていくのだ。そして美咲はそんな方々から『美咲お嬢』と呼ばれて死ぬほど丁寧に対応されていた。

そして中学1年の時に家のリビングに某紅茶の国の女王陛下が父親とノンビリと緑茶を飲んでいるのを見て美咲は考えるのを辞めた。

そんな謎の多い父親だが、美咲が唯一知っている仕事がある。美咲は知っているというより手伝わされている。

その仕事とは居酒屋だ。

だが、基本的にお金を稼ぐ気はないらしく毎週土曜日の夜だけ営業

で、さらには暖簾も看板も出していない。そのためにお店にやってくるのは父親の愉快なキチ集団だけだった。そこで美咲は料理を担当していた。担当していたというより、基本的にこのお店で父親達が呑み始めると料理ができる人間が美咲しかいないだけである。身内営業とは言え、父親はキチンとバイト代を払ってくれている。

時給1万円である。

高過ぎかもしれないが、父親は最初は時給１００万円とか言っていたのだ。それを常識人な美咲が掛け合って1万円まで下げたのだ。それでも高いが、この泡銭は寄付したり妹に作ってあげる羊毛フェルトの材料費にしたりしている。

そして今日が営業日の土曜日である。

父親の友人が誰か来るかはわからない。父親の幼馴染の花園おじさんと氷川おじさんは毎週のように来て父親と罵詈雑言を飛ばしあっている。そしてハロー、ハッピーワールド！のメンバー全員の父親が昔から父親と一緒に美咲に（悪）影響を与えていたおじさんだということをバンドを組んでから知った。

父親は手酌をしながらお酒を飲んでいる横で美咲が料理の準備をしていると、店の扉が開いて男性が入ってくる。眼鏡をかけて和服を着た堅物そうな男性。男性は何も言わずにカウンターに座る。父親も手慣れた様子で男性に出すお酒の準備を始めた。

ビールジョッキ（大）にスピリタス（アルコール度数９６度）を並々と注いでいた。

いつ見ても頭がおかしくなりそうな光景である。普通の店だったら一発クレームで間違いない。

しかし、眼鏡をかけて和服を着た堅物の男性はビールジョッキ（大）を持ち上げて一気にスピリタス（アルコール度数９６度）を飲み干し（絶対に真似しないでください）、空になったビールジョッキ（大）をカウンターに叩きつけて口を開いた。

「蘭の反抗期が長くて辛い」

「それは全部自己責任だろ。なんで蘭ちゃんのやることに口出す上に否定するかなぁ」

「はぁ!?　奥沢はバカですかぁ!?　バンドなんて成功する奴なんか一握り、若いうちから華道の勉強して家を継いだ方が蘭のためになりますぅ!!」
「どうせそれを『自分が考えた口数が少なくて渋いお父様像』で蘭ちゃんに言って喧嘩になったんだろ？」
「け、喧嘩にはなってませんし!?　ちょっと口論になっただけだし!?」
「ここに蘭ちゃんが避難した青葉家の家主からメールがあってだな。『私たちのバンド活動が遊びって言われた。本気でやってるのに』という蘭ちゃんの証言があるが!!？　何か弁明は？」
「青葉のクソがぁぁぁぁぁぁぁ!!!!」
美竹おじさんと青葉おじさんは幼馴染らしく、その娘の美竹蘭と青葉モカも幼馴染らしいが、娘２人は見事に正反対に育った。
父親にバリバリ現役反抗期の蘭と、父親を（それなりに）慕っているモカ。蘭が美竹おじさんと喧嘩したら青葉家に逃げ込むのはいつものことという情報は幼馴染５人でバンドを組んでいる『Ａｆｔｅｒｇｌｏｗ』の面々から聞いた。
美咲の父親・花園おじさん・氷川おじさんの３人幼馴染と、美竹おじさん・青葉おじさんの幼馴染コンビをみて育った美咲には幼馴染という生き物は罵詈雑言と煽り合いをする生き物だと思っていたが、アフグロの普通に仲が良い幼馴染組をみてカルチャーショックを受けたのは美咲の良い思い出だ。
美竹おじさんがスマホを取り出して通話しながらヒートアップしているところを見ると、通話相手は青葉おじさんで思いっきり煽られているのだろう。
美咲が昔から見てきた美竹おじさんは過大な娘自慢をして父親と愉快な仲間達からヘイトを集めるクソ親父だが、娘の前では『厳格な父親』を演じているらしく、それが見事に娘の反抗期に繋がっているようだ。
というか美咲が美竹おじさんの知り合いだとわかってからの蘭からの会話の９割が美竹おじさんのディスりになっていることは美咲

の秘密である。美咲は父親達と違って空気が読めるのだ。
美竹おじさんは最後にスマホを切ってから、父親が用意したスピリタス1本を一気に飲み干した。
「ら～ん!!　何故だ～!!　なぜパパの愛情がわかってくれないんだぁ!!」
「お前の愛情はわかりづらいんだよ。だから蘭ちゃんが赤いメッシュを入れて反抗しちゃうんだ!!」
「らぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁん!!!!　せっかくお母さんにそっくりな綺麗な髪質だったのに染めるなんて何事だぁぁぁぁぁぁっぁ!!!!」
「お前の髪質に似なくてよかったよな。お前に似てたらハゲるところだった」
「俺もハゲませんけど!?　毎日きちんとお手入れして大事にしてますから!?」
「この世には遺伝というのがあってだな」
「現実を突きつけるなぁ!!!!」
父親の笑顔の毒に前衛芸術のような体勢になる美竹おじさん。多分、この姿を蘭に送ったら反抗期は終わると思う。別の意味で避けられることになると思うが。
「我、降臨である!!」
そんな叫びと共に店の入り口がスパーンと開く。
そこに立っていたのは豪奢な黄金の髪にアイス・ブルーの瞳、そしてスラリとした長身に溢れ出るオーラを持つ男性。彼の名前は
「「ラインハルト・フォン・ローエングラム……!!」」
「ジーク・カイザーをつけろデコ助やろう」
「いや、そこじゃないでしょ」
父親と美竹おじさんのボケにドヤ顔で返す男性。それに思わず美咲が突っ込んでしまった。
「ああ、そうだな。美咲たちの世代だったら『金髪＋王様』だったら英雄王・ギルガメッシュか」
「待て奥沢。黄金の獣殿かもしれんぞ」
「誰だとしても我は王者……これこそ絶・対・王・者弦巻家総帥の宿

命か……」
「あ、どうでもいいんで早く店に入ってもらえますか？　これ以上ご近所の評判を悪化させたくないんで」
父親達のクソどうでもいい会話を打ち切って弦巻おじさんを店内に入れる。父親達と罵詈雑言を飛ばしながら娘自慢をしてくる弦巻おじさん。ちゃんと言う事を聞いてくれる辺りに美咲の話を一切聞かずに、バンドへ巻き込んだ娘との違いがある。
「とりあえず弦巻。何呑む？」
「うむ、今朝日本に帰ってきたばかりでな。気付け代わりに烏竜茶をもらおうか」
「わかった」
父親はそう言いながら弦巻おじさんの前にピッチャーを置き、そこにウォッカ9、ウイスキー1の割合で注ぐ。確かに色合いは烏竜茶かもしれないが、中身はかなりのモンスターである。
しかし弦巻おじさんは笑顔でピッチャーを傾けてそれを一気飲み（絶対に真似しないでください）する。
「うむ、この燃えるようなアルコールの味。これこそ烏竜茶だな」
「いや、普通の烏竜茶に火はつきませんから」
「イギリスで部下に烏竜茶を買ってこさせたら、普通のお茶だったんだが信じられるか？」
「「マジかよ」」
「部下の人が普通ですから」
美咲のツッコミは親父達は華麗にスルー。
「ああ、そうだ。奥沢の娘とは思えないくらいしっかりとした娘・美咲よ。いつものは用意できているか？」
「おう。お前は喧嘩売ってるのか？」
胸ぐらを掴み会い始めた父親と弦巻おじさんは見なかったことにして、奥に置いてある鞄の中からＡ４用紙を1枚だけ取り出す。
これはこころと同じバンドに所属してから弦巻おじさんから依頼された『今週のこころちゃん情報』である。
別に珍しいことは書いてなく、『ハロー、ハッピーワールド！』の筆

頭問題児・弦巻こころの行動を書いているだけだ。
美咲はそれを持って弦巻おじさんのところに戻る。この間は1分もなかったはずなのにカウンターには大量の空き瓶が転がっていた。
（あ、今日は2人だけだから消費少ないな）
そんな毒された思考を持ちながら美咲は弦巻おじさんにＡ４用紙を渡す。弦巻おじさんは目を輝かせながら（この辺は娘のこころとソックリ）熟読し、大事そうに懐にしまった。
「うむ。いつも通り着目点がナイスである。部下達とは違った点で見てくれるから我も大安心である」
「はぁ、どうも」
弦巻おじさんのお褒めの言葉を右から左に聞き流す。美咲にとって問題児達の世話に比べたら簡単なお仕事である。だってパソコンはキーボードを打ったら言う事を聞いてくれるからだ。
「こいつはいつも通りの謝礼である」
そう言って弦巻おじさんが出してきたアタッシュケースの中にはドラマでしか見ないような札束の詰め込まれた姿が!!
「いや、弦巻おじさん。いつも言ってますけど受け取れませんから……」
「何を言う!!　弦巻家は仕事をすれば相応の対価を払う!!　当然のことだぞ!!」
「だからってドル札はないだろ。美咲は高校生なんだから日本円にしろよ」
「お父さん、違う。そうじゃない」
美咲の父親のズレたツッコミに美咲はツッコム。しかしオヤジーズはすでに話は終わったとばかりに新しいお酒を空け始めた。こうなるとお金を受け取るしかない。まぁ、いつも通りに母親に預けたら弦巻家に戻るだろう。そして父親は庭の大木に吊るされるのだ。
「うん？　今日は花園はどうした？」
「あぁ、花園な。昼間に奥さんにあったからロブスターと称してザリガニを渡して、特製ドリンクとして『スースーウォーター』を花園に渡してくれって頼んだから晩御飯の準備で忙しいと思うぞ」

父親はいつも通りに花園おじさんを不幸に落としたらしい。天然な奥さんと若干の電波が入った天然の娘を持った花園おじさんには気苦労が絶えない。そこに幼馴染の父親と氷川おじさんが加わることによって花園おじさんの怒りは有頂天になる。その証拠に美咲のスマホには花園おじさんから『あのバカ殺す』と言う殺意に溢れたメッセージが大量に飛んできている。父親に直接飛ばさないのは父親が拒否設定をしていることに気づいているからだろう。何せ逆の立場だったら同じことをやっている。

父親にソッと花園おじさんからのメッセージを見せると微笑しながら消去した。

「それだったら氷川はどうした？」

「氷川は国際警察連合の仕事で海外にいる時に『紗夜ちゃんがライブやるぞ』って連絡したら仕事ほっぽり出して帰ってきて紗夜ちゃんにマジ説教食らった上に中条長官に連行されてったよ」

「氷川って確か国際警察連合の中で偉くなかったか？」

美竹おじさんの質問に弦巻おじさんが頷く。

「国際警察機構の中でも最強の能力を持つと言われる九大天王の1人だったな……コードネームは……なんだったかな、奥沢？」

「『軍師・韓信元帥』だな。軍師なのか元帥なのかハッキリさせろと突っ込んだ記憶があるな」

美咲が何の気なしにスマホでニュースを見ると素手でＢＦ団の巨大ロボを殴り倒し、十傑集の衝撃のアルベルトと激闘を繰り広げる氷川おじさんの写真があった。

父親曰く『氷川は天才』と言っていたが、巨大ロボを殴り倒したり、物理法則を真っ向から喧嘩を売っているＢＦ団の十傑集の1人と対等に戦えるのは『天才』という括りで留めていいのだろうか。

そこまで考えて父親の友人には珍しくない、という結論に至った美咲は末期症状であったが、残念ながら突っ込んでくれるマトモな神経の人物がこの場にはいなかった。

そしてそれ以上に衝撃的なメッセージが美咲のスマホに飛び込んでくる。送信者は『ハロー、ハッピーワールド！』において普通の先

輩でとてもいい人な松原花音先輩だった。彼女がいるからバンドでの美咲のＳＡＮ値が保たれていると言っても過言ではない。
しかし、その花音先輩から送られてきたのはとても危険なものだった。
『お父さんが美咲ちゃんのお父さんのお店に行ってくると言って家から出て行っちゃいました』
花音先輩は極度の方向音痴である。その父親の松原おじさんは『方向音痴を極めた男』と言うべき人物である。近所のコンビニに出かければブラジルで発見され、県外旅行に出かけると異世界に迷子になるという方向音痴というレベルで納めてはいけないレベルの方向音痴である。松原おじさんのおかげで花音先輩は『私はまだ大丈夫だと思う』という根拠に一切ならない自信を持ってしまっている。
とりあえずそれどころではないので、美咲は黙って父親に花音先輩からのメッセージを見せる。
すると一瞬で父親が真顔になってスマホを取り出した。父親は弦巻おじさんに見るように合図を出し、弦巻おじさんもメッセージを見るとごついトランシーバー見たいなものを取り出した。
「あ、氷川か？　大問題だ。松原のバカがリード付けずに出かけた。そう、恐ろしいことに１人だ。すぐに国際警察連合でも探索してくれ。以前みたいにＢＦ団の秘密研究所とかに入り込む可能性もあるから」
『あ、フロイドか。ああ、ちょっと大問題がな。そう。いつものやつがまた行方不明になった。また某大国のキャンプ・ノーとかに迷い込んで外交問題になったらＨＣＬＩも動きにくくなるだろう？　わかった。貿易でＨＣＬＩの船を優先的に使う。頼むぞ』
父親は氷川おじさんに連絡しているようだったが、弦巻おじさんは英語で喋っていたので誰と連絡していたのかわからなかった。しかし、美咲は本能で触れてはいけないと察知した。幼いころから父親と愉快な仲間たちによって鍛えられた第六感は伊達ではないのだ。
「とりあえず俺も日本各地の門下生に手配書を送ったが……」
「……日本国内にいる可能性は低いよなぁ」

「我はそろそろ宇宙に飛び出ても不思議でないと思ってる」
「既に異世界を何回も経験してるからな」
美竹おじさんの言葉に父親が続き、弦巻おじさんの言葉に美竹おじさんが続いた。
過去に一度だけ父親に軽い冒険記を話してもらったが、正直現実味がなかった。
『なんで異世界に行って魔王討伐してるんだ。あんたたちはむしろ討伐される側だろう』という気持ちを持った美咲は正しい反応だと今でも信じている。
そして突然に父親のスマホにメールの着信を知らせる音がなる。父親はそれを確認し、弦巻おじさんにも見せてから店に備え付けられたプロジェクター(娘自慢大会の時の写真や動画上映用)を起動する。そして1枚の写真が映し出された。
そこには『青葉親子に挟まれて恥ずかしそうに顔を赤らめている蘭ちゃん』の姿が!!
それを見た美竹おじさんは怒りと嫉妬のあまり発狂して青葉おじさんに電話をかけ始め、父親と弦巻おじさんは爆笑していたのだった。

ちなみに松原おじさんはローマ教皇と和やかに談笑しているところをキリスト教徒によって発見され、氷川おじさんによって捕獲された。

親バカパラダイス～親バカだらけの商店街～

美咲は平日の放課後、父のキチ友の1人に呼び出されて、父のキチ友が営業している喫茶店である『羽沢珈琲店』にやって来ていた。平日から父のキチ友と会う苦行はしたくはないが、ここで無視すると土曜日の店で会った時にウザ絡みが酷くなることは経験済みなので、用事がない時は会っておいた方がいいのだ。

そして美咲の座っているテーブルの反対側には美咲を呼び出した張本人が座っている。

１００人に聞いたら２００人が『美形』と答えるであろう顔立ちで父達曰く『吐き気を催す程のイケメン』『友人じゃなかったら殺して埋めてる』と言われるレベルの美男子。高校生の娘がいるとは思えないほどの若々しさ。

いや、本当に外見が若すぎるのだ。見た目だけなら２０歳前後にしか見えない。父親達の写真を使って年代別に分ける遊びをやったことがあるが、この人だけは年をとるにつれて若返っていくのだ。他の面々がキチンと年をとっていただけに軽く恐怖を覚えた。

話が逸れた。

髪の毛の色は娘さんと同じ髪色で、それを綺麗に整えている。そしてまさしく黄金比と言える体型を持っており、長い脚を優雅に組みながら『羽沢珈琲店』のマスターが入れたコーヒーの香りを楽しみながら一口飲むと、テーブルにコーヒーカップを置いてからゆっくりと口を開いた。

「千聖が共演ＮＧを解除してくれないんだけど、どうしたらいいと思う？」

「まずはラジオ番組の白鷺さん語りを辞めてから考えたほうがいいですよ、白鷺おじさん」

不思議そうに首を傾げている男性は、幼い頃から活躍を続ける若手女優・白鷺千聖の実父にして、世界を代表するイケメン俳優の白鷺おじさんであった。

（相変わらず白鷺おじさんを『おじさん』呼びするの違和感がある

なぁ）
何せ見た目は２０代。下手したら１０代後半である。白鷺千聖さんと親子役で共演を熱望しているが、どう見ても親子に見えないためにその夢が叶っていないのだ。
「というか今回は何をやったんですか？　一ヶ月くらい前に店に来た時に『3年ぶりに共演ＮＧ解除された！』って言ってテンションクソ高かったじゃないですか」
「いや、そんなに大したことはしてないよ？」
この人達の大したことしてないは、娘達にとっては大惨事になることが頻繁に起こる。重すぎる娘愛にも困ったものだ。
「いや、今回は本当にやってないんだ。パスパレのライブに丸山と氷川と大和と若宮と一緒に行って」
１ＯＵＴ
「アイドルのライブだから全員で法被に鉢巻、押しメン（それぞれの娘）の名前が書かれた団扇を用意して」
２ＯＵＴ
「ライブが始まったら最前列で全員で一緒に『コンビネーション至高ヲタ芸パスパレフォーメション』をやっただけなんだけどなぁ」
３ＯＵＴ!!　試合終了!!　完全試合のおまけ付きだった。
白鷺おじさんは店に訪れた時には想像できないが世界的にも有名な俳優である。氷川おじさんも娘の紗夜さんにマジ説教を食らっているが、国際警察連合として活躍するスーパーヒーローとして世界的に有名である。
そんな2人が新人アイドルのライブの最前列でヲタ芸を披露する？　とても酷い放送事故だろう。
「それは普通に白鷺さん達は嫌がると思いますよ」
「そうかなぁ……日菜ちゃんとイヴちゃんには好評だったんだがなぁ」
「ちなみに丸山さんと大和さんはどうでしたか？」
「笑顔が引きつっていたかな」
この親バカ達はその笑顔の引きつりも『パパの応援に恥ずかしがっ

ている』という自分たちに都合のいい解釈をする。
「なぁ、羽沢はどう思う？」
そこで白鷺おじさんは『羽沢珈琲店』のマスターであり、父親達のキチ友である羽沢おじさんに声をかけた。
コーヒーの準備をしていたダンディーな男性。まさしく喫茶店のマスターという風貌をしているのが『羽沢珈琲店』のマスターであり、美咲の父親のキチ友である羽沢おじさんであった。
コーヒーを準備しながら羽沢おじさんは口を開く。
「お前さん達は表に出すぎるのがよくないんだよ。俺みたいに娘の頑張りを応援するために食生活を完璧に整えてあげるくらいでいいんだよ」
「いえ、羽沢おじさんの完全なる栄養管理にはドン引きです。なんで顔見ただけで羽沢さんがその日に消費したカロリーと、必要な栄養素がわかるんですか？」
「不思議なことを言うな、美咲ちゃんは。それくらい娘を持つ親であると同時に料理人としてなら必須スキルだよ？」
そんな必須スキルは聞いたことがない。あれ？　だが、アフグロの面々から聞いた話だと
「この前、羽沢さんは頑張りすぎて過労で倒れたって聞きましたけど？」
「あぁ、それね……」
美咲の問いに苦悶の表情を浮かべる羽沢おじさん。美咲もこの話を聞いた時はおかしいと思った。何せ羽沢おじさんのパーフェクト体調管理を突破して過労で倒れたのだ。それは白鷺さんが白鷺おじさんと楽しそうにテレビ共演するくらいにありえない出来事だ。
「北沢のアドバイスを聞いたらね……」
「ム、呼んだか」
羽沢おじさんの言葉と同時に鍛え抜かれた体格を持った男性が入店してきた。２ｍを超える巨体に鍛え抜かれた筋肉。そして猛獣のような表情。多分幼い子供が見たら泣く雰囲気。実際に美咲はファーストコンタクトで泣いたと言う話を父から聞いた。

そしてその男性を白鷺おじさんと羽沢おじさんは軽く手をあげて迎え入れる。
「いらっしゃい、オーガ」
「そろそろ動物園に捕まるんじゃないかい？　北沢」
鬼呼ばわりの羽沢おじさんと、人に対して死ぬほど失礼なことを言い放つ白鷺おじさん。
しかし、美咲のバンド仲間である北沢はぐみの実父である北沢おじさんはマッスルポーズを取りながらニヤリと笑った。
「俺の筋肉に麻酔銃風情が通じるわけがない」
「「それな」」
「いえ、そこは通じてください。人類として」
美咲のツッコミを無視して三人はＨＡＨＡＨＡとアメリカンに笑っている。
北沢おじさんは元ＲＩＫＩＳＨＩである。力士ではなくＲＩＫＩＳＨＩである。３０歳で引退するまで１度も負けたことがない角界を代表する大横綱で、伊勢神宮で行われた奉納土俵入りの四股で震度７の地震を引き起こしたのは日本のみならず世界を驚かせた。そして得意技の張り手は１０ｍの厚さを持つコンクリートをもブチ抜いたために初土俵と共に日本相撲協会から禁止されたのである。
はぐみが北沢おじさんの娘と知った後に、ミッシェルの中に入っている時に飛びつかれた時は死を覚悟したが、北沢おじさんと違って女の子だったせいか、それか母親に似たせいかわからないが、腰を痛めるだけで済んだ。
ちなみにはぐみが１００ｍを８秒フラットで走り抜けることができるのは完全に余談である。
そして軽く罵倒を飛ばし合いながら白鷺おじさんと美咲の座っているテーブルに着く北沢おじさん。
「それで？　なんの話だ？」
「ほら。俺が北沢に体力作りを聞いて、それを実行したらつぐみが倒れちゃった時の話だよ」
「あぁ。『人間は限界を突破すればするほど強くなる』ってアドバイ

スした時か。２日で倒れたんだったか？　羽沢、お前の娘は体力がなさすぎるぞ。うちのはぐみは５日はいける」
「は？　うちのつぐみは北沢と違って繊細なんだよ？」
「あ？　お前、今、うちのはぐみがガサツって言ったか？」
「よすんだ親バカ!!」
「「何故止めるんだ、親バカ!!」」
今にも掴み合いの殴り合いを始めそうな羽沢おじさんと北沢おじさんを止めたのは白鷺おじさんだった。
「みんなと約束したじゃないか!!『悪いのは父親であって、娘には何の落ち度もない』って!!」
「「!?」」
白鷺おじさんの発言に『そうだった』と言う表情になった羽沢おじさんと北沢おじさん。
「ごめん北沢!!　はぐみちゃんは悪くなかったよ!!　北沢には殺意わくけど!!」
「俺も悪かった羽沢!!　つぐみちゃんは超良い子だよ!!　羽沢は殺してやりたいけど!!」
抱き合いながら罵倒し合う羽沢おじさんと北沢おじさん。実に茶番である。美咲は途中からほとんど聞いていない。
ココアが飲み終わり、謝罪という名前を借りた罵倒も聞き飽きたので、美咲はようやく親バカ達に口を挟むことにした。
「それで？　北沢おじさんは羽沢おじさんに何か用事があったんじゃないですか？」
「おお、そうだった」
美咲の言葉に（親バカ達は常に持っている）娘の写真を見せ合っての自慢大会に入り始めていた北沢おじさんはようやく本題に入った。
「羽沢に頼まれていた最高級和牛なんだが、何時くらいに持ってきたらいい？」
「あ、できるだけ早めにお願いするよ。２０時から開始だからさ」
「……あれ？　今日ってディナーの日でしたっけ？」
２人の会話を聞いていた美咲が思わず問いかけてしまう。

羽沢おじさんは娘の顔色を見ただけで1日のカロリー消費量がわかったり不足している栄養素がわかるくらいの変態で親バカだが、料理の腕はガチである。娘の嫌いなものをなくすための工夫をするために世界中の料理を研究し、自分の糧にし続けた。その結果、喫茶店でありながら料理のミシュランガイドで三つ星を獲得するという快挙を成し遂げた。だが、羽沢おじさんは娘の嫌いな『ブラックコーヒー』を克服させてあげられないことが全身の毛穴から血が吹き出すくらいに悔しいらしく、ミシュランから送られてきた証明書的なものをファイヤーしてしまう暴挙にでた。

まぁ、本人的にどうであれミシュランの三つ星を獲得したということで美食家達が集まるようになってしまい、そういう方々を相手にするディナーの日を毎週水曜日の夜に設けている。本人的に片手間で作っているらしいが、評価は高い。

「というかディナーの日にち増やしたらどうですか？　そういう要望多いんですよね？」

「あぁ、うん。なんかクソみたいにいっぱいくるよ。週一ですらつぐみとの時間を削っているんだから、これ以上あいつらに割く時間は1秒もねぇから」

安定の親バカだった。

「それより珍しいね。羽沢が高い肉を使うなんて。北沢、羽沢はいくらの肉を買ったんだい？」

「うん？　ああ、これくらいだな」

美咲も白鷺おじさんと同じ疑問を抱いたので、北沢おじさんが差し出した伝票を見る。

そこには肉の値段とは思えないくらいの0がいっぱい並んでいた。

美咲が知っている中でもこんな金額が簡単に出せるのは父親と弦巻おじさんと氷川おじさんと……

（あ、結構いた）

美咲自身もちょっと驚くくらいに出せる人がいた。

そしてその1人である白鷺おじさんも珍しそうに頷いていた。

「これは奮発したね……結婚記念日じゃないし、つぐみちゃんの誕

生日もまだだったよね？　何があったんだい？」
白鷺おじさんの言葉に羽沢おじさんは力強く頷く。
「つぐみが『みんなに元気になってもらいたくて……お父さん、料理作ってくれる？』って上目遣いでお願いしてきてな。愛娘のお願いだぞ？　断れるか？」
「「それは無理だわぁ」」
羽沢おじさんの言葉に納得した表情で頷く白鷺おじさんと北沢おじさん。羽沢おじさんの料理で慣れてしまってアフグロの皆さんは大丈夫だろうかと思ったが、美咲は気にしないことにした。知り合いの親バカ達を考えると娘のためなら世界中から美味しいものを集めてくる気がしたからだ。
「あとはパンなんだが……山吹のやつ、もうそろそろ時間なのにまだ持ってこないな」
「こんにちは～」
羽沢おじさんの言葉と同時に、お店の入り口が開いて美咲と同い年の少女が入ってくる。美咲と同じ花咲川女子学園に通う女子高生だ。
「「お、久しぶりだね。撲殺天使サーヤちゃん」」
「あはは、すいません。そろそろそれ忘れてもらっていいですか」
オヤジーズの言葉に思いっきり引きつった笑みを浮かべる山吹ベーカリーの長女・山吹沙綾。沙綾の父親も美咲の父親と友人であり、親バカ仲間である。それ即ち沙綾の黒歴史も美咲の父親と愉快な親バカ達全員が知るところである。
「え、と。奥沢さん……聞かなかったことにしてくれる？」
「大丈夫。山吹さんが幼稚園の時に山吹ベーカリー名物の『鋼鉄より硬いバゲット』を武器にして魔法少女の衣装着ながら接客していたことなんて知らないから」
「なんで知ってるの!?」
しまった。間違った。聞いてませんよアピールするつもりが、お店で山吹おじさんから聞いた『撲殺天使サーヤちゃん』誕生秘話を思い出していたせいで、山吹さんの黒歴史を抉ってしまった。
美咲は打ちひしがれる沙綾を必死にフォローして、なんとか立ち直

らせる。
「は、羽沢さん。お父さんから頼まれて注文されたバゲットを持って来ました」
「ああ、悪いね沙綾ちゃん。パンの腕前は山吹が1番だからさ。性格クズだけど」
「それは人のこと言えないよね、羽沢」
「白鷺もだろうが」
オヤジーズの中で『お前が言うな』のブーメランが飛び交っている。この親バカ達は『自分以外は頭がおかしい』と言う共通認識を持っているせいで、このようなブーメランが飛び交う。
全員を知っている美咲からすれば全員平等にキチガイである。
数本のバゲットの入っているバスケットを沙綾から受けとり、1本づつ確認する羽沢おじさん。
しかし、1本のバゲットで笑顔が止まった。羽沢おじさんはそのバゲットをカウンター越しにある簡易厨房から包丁を取り出し、それをバゲットに向けて振り下ろす。
甲高い音と共に包丁が折れた。
焦る沙綾。鋼鉄より硬いバゲットだったかと納得する美咲。人差し指と中指で折れた包丁を掴む北沢おじさん。
「す、すいません。私が間違えちゃったかもしれません」
「いや、それはないよ沙綾ちゃん。ほら、これを見てごらん」
優しい笑顔を浮かべながらバスケットに入っていた紙を沙綾に見せる羽沢おじさん。
そこには赤字で「Ｋｉｌｌ　Ｙｏｕ」と書かれていた。
引きつった笑顔を浮かべる沙綾をよそに、羽沢おじさんは店の奥にある厨房に入っていく。
そして戻って来た羽沢おじさんの手には動物の解体に使うような肉斬り包丁が握られていた。
「じゃ、俺はちょっと用事ができたから出てくる。お代はカウンターに置いといて」
「「あいよ」」

「あ、ちょ!?　羽沢のおじさん落ち着いてください!!」
勢いよく飛び出していく羽沢おじさん。それを止めるために追いかけていく沙綾。
「羽沢は何か山吹に恨まれるようなことしたのかい？」
「フム、俺もお客さんから聞いただけだから詳しくは知らないが、『沙綾ちゃんよりつぐみちゃんの方がいい子ね』って言われて気をよくした羽沢がお代を無料にしたって話だな」
「ああ、それは戦争案件だね」
白鷺おじさんと北沢おじさんの会話をＢＧＭに『羽沢珈琲店』から見える商店街の中央広場を見ると、バゲットと肉斬り包丁で戦う山吹おじさんと羽沢おじさんの姿があった。ここの商店街じゃなかったら正気を疑う光景だ。
「……止めなくていいんですか？」
美咲は常識人として確認を取る。
「大丈夫だろ。すでに宇田川に連絡行ってるだろうからな」
「それ下手したら騒ぎ大きくなりますよね？」
美咲の発言は北沢おじさんに笑い飛ばされた。
宇田川おじさんも父親の仲間で、常識人よりの非常識人だ。街の人たちからも信頼されていて、喧嘩の仲裁とかもしょっちゅうやっている。しかし、喧嘩の時はすぐに手が出てしまうのも事実であり、喧嘩をしているのは長い付き合いの羽沢おじさんと山吹おじさんだ。
間違いなく被害が増える（確信）
美咲の胃痛の原因になるのは父親と愉快なキチ達だけで十分なので、商店街の平和はスルーする。これは逃げたわけじゃなくて、保身のためである。『美咲の身の安全が最優先』と言う父親の教えを実行しているだけである。だから必死になって止めようとしている沙綾を見捨てるのである。
「ああ、そうだ。北沢にお願いしたい仕事があるんだよ」
「うん？　俺にか？　肉体労働だったら氷川の方がいいだろう」
そして思い出したように口を開いた白鷺おじさん。オヤジーズ内で仕事を頼みあって助け合うのは（驚愕するごとに）珍しいことでは

ない。だが、北沢おじさんの得意分野である肉体労働は人間を辞めている氷川おじさんがいるので、あまり出番はない（全くないわけではない。例えばビルの解体工事とか）。
「いや、北沢にしか頼めない仕事だよ。何せ『Ｂｅａｒ　Ｗａｒｓシリーズ』のことだからさ」
『Ｂｅａｒ　Ｗａｒｓシリーズ』。それは白鷺おじさんの無駄遣いと言われた超Ｂ級映画シリーズである。異星人Ｂｅａｒが地球圏に襲来し、地球が危機に陥った時に１人の青年がＢｅａｒ帝国に対して反旗を翻す。その青年役だったのが白鷺おじさんである。そしてＢｅａｒ帝国の指導者役が毛皮と髭を蓄えたら熊にしか見えない北沢おじさんであった。
「ム、だが『Ｂｅａｒ　Ｗａｒｓシリーズ』は『Ｂｅａｒ　Ｗａｒｓ～Ｐａｎｄａ帝国の襲来～』で完結しているだろう？　さらに作成をしていた会社も倒産したと聞いたが？」
「うん、そうなんだけどさ。『訓練されたＢｅａｒファン』から是非とも復活を望む声が多くてね。僕が主導して復活させることにした」
「だが、『Ｂｅａｒ　Ｗａｒｓ～Ｐａｎｄａ帝国の襲来～』の最終局面で、主人公が保護していた幼きＢｅａｒが争い続ける人類、Ｂｅａｒ、Ｐａｎｄａに嫌気がさし、隠されていた『Ｂｅａｒ　Ｐｏｗｅｒ』を解放してＢｅａｒとＰａｎｄａ達は元の世界に戻り、主人公は行方不明になってしまっただろう」
昔のロボットアニメにある全滅ＥＮＤである。
「その辺りは考えているさ。Ｂｅａｒ　Ｗａｒｓシリーズの後継者が再度襲来して来たＢｅａｒ帝国に立ち向かう『Ｂｅａｒ　Ｗａｒｓ Ⅱ～新しきＢｅａｒ　Ｂｒａｖｅ　Ｈｅａｒｔ～』として撮影する」
「資金面はどうする？　このシリーズは昔からＢ級映画のクセにバカみたいに金がかかっていただろう」
「その辺りも大丈夫。奥沢と弦巻の資金援助を取り付けた」
白鷺おじさんの言葉に美咲に嫌な予感が駆け巡る。
「劇中に『ハロー、ハッピーワールド！』の楽曲を使うことで２人は快諾してくれた。むしろ好きなだけ金を使えとも言われたね」

ファッキンファーザー。ハロハピにおける美咲の立ち位置はクマの着ぐるみを着たＤＪである。それが『訓練されたＢｅａｒファン』のいる作品に登場する？　ミッシェルの存在が際立ち祭り騒ぎになりそうだ。

「主人公はどうするんだ？　流石に白鷺を主人公にするわけにいかないだろう」

「ふ、その辺りのことも考え済みさ」

なんとしてもこの企画を潰す覚悟を決めていると、なんだが嫌な予感が美咲の背筋を通過する。

そんな美咲を無視するように白鷺おじさんは話を続ける。

「亡き英雄の意思を継ぐのは実の子供だと相場が決まっている……つまり主人公は千聖にお願いするつもりだ」

「白鷺おじさんは白鷺さんに共演ＮＧされていますよね？」

美咲の発言に白鷺おじさんは異性だったら１２０％見惚れる笑顔を浮かべる。それを見て美咲の嫌な予感が増大する。

「美咲ちゃん、千聖の説得よろしくね」

「こいつマジで死ねばいいのに」

白鷺おじさんの言葉に美咲は思わず心から湧き上がった言葉が自然と紡ぎ出されたのだった。

娘達の戦い～商店街からの脱出～（前編）

「まぁ!!　美咲!!　その素敵なものはなにかしら!!」
「羊毛フェルトで作ったみなさんご存知、東大寺の金剛力士像の阿行像ですよぉ」
　美咲は休み時間の間に、ヒマな時間を使って趣味である羊毛フェルトを作っていると、美咲の所属するハロハピの筆頭問題児のこころがやってきた。今は1番大事な口の部分を作っているので邪魔をして欲しくないが、可愛くない羊毛フェルトはあげても妹がすごく複雑な表情になるので、まぁ適当でもいいかと思って適当に仕上げてしまう。
「美咲はすごいのね!!　一瞬だけ手が見えなくなったと思ったら、あっという間に完成させてしまったわ!!」
「完成させるだけなら簡単なんで。う～ん、ちょっと顔の作りが雑になったかな」
『え!?　それで!?』
　美咲のポツリと溢れた発言にクラスメイト達から総ツッコミが入った。美咲的には微妙な出来だが、クラスメイト達からしたら超リアルらしい。資料集の写真との見比べを開始し始めていた。
「そうだわ!!　どうせだったらもっと素敵なものを作りましょうよ!!　そうねぇ……そうだわ!!　お父様がフランスに連れて行ってくれた時に見たモンサンミッシェルを作りましょう!!」
「……まぁ、ドイツのノイシュヴァンシュタイン城なら作ったことがあるんでできると思いますけど……」
　美咲の言葉にこころは目を輝かる。クラスメイト達からは驚愕の表情で見られているので実に対照的だった。
「素敵だわ!!　そうだ!!　どうせだったら原寸大で作りましょうか!!　場所や材料だったらお父様か黒服さん達に頼めばきっと大丈夫よ!!」
「こころ、ここは学校だからセーフだけど、学校外では絶対に言っちゃダメだよ?」

「？　どうしてかしら？」
「どうしてもです」
「う～ん……よくわからないけど、わかったわ!!　美咲の言うことは聞いた方が良いってお父様も言っていたし!!」
とりあえずこれで黒服さん達の仕事は減ったはずである。それに美咲はこころに気づかれないようにため息を吐く。こうして親バカ達の目の届かないところでも親バカ達の尻拭いをするのは正直めんどくさいが、仕方ないのである。
ちなみにこころに常に付き従って無茶振りと護衛を同時にこなす黒服の方々は学校に入って来られない。花女において『関係者以外立入禁止』を厳守させる『鬼の風紀委員・氷川紗夜』の存在のおかげである。たまに警戒網を突破して侵入を試みているようだが、常日頃から隠密に無断侵入をしようとする氷川おじさんや若宮おじさんのちょっと人類かどうか怪しい方々の侵入を阻んでいる紗夜さんを相手にするには力量不足なので、大抵は紗夜さんによって叩き出されている。そのために紗夜さんは花女に在学している親バカの重たい愛を受けている娘達からは英雄視されている（無論、イヴさんとかおたえとか気にしてない人間も数少なくいる）。
それからこころの思いつきを懇切丁寧に美咲が却下していると、教室の入り口が勢いよく開かれる。
「みーくん!!　こころん!!　今日のお昼は商店街に行こう!!」
「その前にはぐみ。勢いよく扉開きすぎだから。ほら、また扉がひしゃげてる」
「あれ?　そんなに勢いよく開けてないのに？」
北沢の血族の『勢いがない』はほとんどの場合がオーバーキルである。
「それで？　なんで昼食に商店街に？　いつも通りに別に食堂でも良いし、購買で買ってきてどこかで食べるでも良いんじゃない？」
花女に在学しているハロハピのメンバー（こころ、はぐみ、花音先輩、美咲の４人）で一緒に昼食をとることは珍しくはない。だいたいはこころとはぐみにツッコミを入れる美咲の構図で、花音先輩が苦笑

しながらそれを見ていて、時折目を離した隙に行方不明になる花音先輩を紗夜さん率いる風紀委員会の協力で大捜索になるくらいである。
「忘れちゃったのみーくん!! 今日は月に一度の『あの日』だよ!!」
はぐみの言葉に美咲は脳内カレンダーをめくる。
「……ああ、そっか。今日だったっけ。まぁ、それなら納得だけど。はぐみは向こう側じゃないの？」
「お父さんにお願いしたら許可してくれたよ!! だから初参加!!
あ、あとかーくん達のポピパのメンバーにも声かけたよ。さーやんは向こう側だから不参加だけど、みんな来るって!!」
食べることが大好きなおたえが毎回参加しているのは知っているが、戸山さんとりみと市ヶ谷さんがこの常識を疑うイベントで正気を保っていられるか心配になる美咲であった。

４時間目の授業の途中にイベントに参加する美咲、はぐみ、おたえ、香澄、りみ、有咲は学校から出て商店街に歩いて向かっている。
「おたえ、紗夜さんには声をかけなかったの？」
「連絡したら『風紀委員としてあのような行事に参加するわけにはいきません』って言われて断られちゃった」
（逃げたな）
父親同士の関係の影響で母親と一緒に謝罪に行ったり、来られたりしているうちに美咲とおたえ、氷川姉妹の４人は仲良くなった。大抵は天然なおたえとフリーダムな日菜さんに紗夜さんと一緒に悩まされることになるのだが。
「な、なぁ。奥沢さん。ちょっと聞いて良いか？」
今更ながら自分の胃痛の原因が親バカ達以外にもいたことに内心で驚愕している美咲に話しかけてきたのは元引きこもりなのに成績上位、ツンデレ、金髪、低身長、巨乳という属性過多な市ヶ谷さんだった。
「私達はこれから昼食を食べに行くんだよな？」
「ええ、まぁ」
美咲の言葉に有咲は思わず声を荒げた。

「それなら何で教師に出した『昼食外出許可』を出した時に教師から『そう……無事に帰ってきてね』って言われた上に、教室から出てくるときにクラスメイトの一部から『絶望的な戦地に行く兵士を見る視線』で見られるんだ!?」
「有咲」
そんな荒げた声を止めたのは今までのキャラからは考えられないくらいにマジ顔をしたおたえだった。
「これから行くのは激戦の戦場。甘い心構えだと戦死するよ」
「昼食を取りに行くんだよなぁ!?」
おたえの発言に市ヶ谷さんの渾身のツッコミが入った。
「あ～、市ヶ谷さんは今回の昼食がどんなものだか聞いてる？」
「いや、香澄に『昼ごはんをみんなで商店街に食べに行こう』って誘われただけなんだが……」
「ちなみに戸山さんはこれからどんな食事をするか知ってる？」
「ううん!!　知らない!!　はぐから『美味しいものを食べに行こうよ!!』って誘われただけだから!!」
はぐみは一切説明をしなかったらしい。
まぁ、ちょうどよくお店に到着したので超簡潔に食事方法を説明する。
「簡単に言っちゃうとあたし達はここ『羽沢珈琲店』でこれから食い逃げをします」
「「はい？」」
美咲の言葉に一緒に来ていて常識人なりみと市ヶ谷さんから惚けた返事が帰って来た。

「この商店街には全部で7件の飲食店があります。それが持ち回りで1ヶ月に一回だけ、食い逃げが許される日があるんです。今日が今月の日」
美咲の軽い説明に香澄は楽しそうにしているが、常識人なりみと有咲はすごく微妙そうな表情になっている。美咲も気持ちはわかるが、説明を続ける。

「３０年くらい前に地元の男子高校生がこの商店街の飲食店で食い逃げをしたんですよ。まぁ、地元な上に地域密着型の高校だったのと、それをやった男子高校生２人組みは地元で有名人だったんで、商店街から逃げ切れずに商店街の方々によって迅速に捕縛されました」

その男子高校生２人組みが白鷺おじさんと瀬田おじさんなのは話に関係ないので省く。

「商店街の方々はとっ捕まえた男子高校生２人組みを学校や警察に連絡する前に事情聴取をしました。そこで男子高校生２人組みは『金はない。だが、腹が減った。だから食って逃げた』と言ったそうです。あ、市ケ谷さん。まだ説明続くんで、もうちょっと突っ込みは待ってください」

有咲のツッコミを封じつつ、美咲は説明を続ける。

「物流が豊かじゃなくて、溢れて残して捨てるほどなかった時代を生きていた当時の商店街の大人達は男子高校生の『腹が減った』という気持ちに強く共感できたそうです。だから警察に突き出さずに『金がない分は働け』という寛大な処置になりました。そこから発展して当時の商店街の会長が無銭飲食してもその分商店街のどこかの店で働けば……まぁ、バイトですね。それで補填したら許されるという超ローカルルールを作りました。それで月に一回行われる食い逃げの日で捕まった方々は逃げ切った方々の分も含めて全員の支払い分強制労働につかされます。とりあえず、軽い説明はこれくらいですけど、市ケ谷さん、発言をどうぞ」

「この商店街おかしくないか!?」

超今更である。

「え、えっと。食い逃げの日についてはわかったけど……『羽沢珈琲店』ってテラス席なかったよね……？」

「あ、それは食い逃げの日限定席です。結構長くやってる伝統ゲームなんで地元高校生だけじゃなくて、地元中学生も参加するんで」

「中学生も参加するのか!?」

「食い逃げする参加者の目印がその学校の制服なんで、制服を着始める中学生から参加が可能ですよ」

美咲の言葉に有咲が地元の知られざる狂気に軽く戦慄している。
「ちなみにおたえは中学入学と同時に参加し始めて、1度も捕まったことがない超エリート食い逃げ戦士です」
「本当!?　おたえすご～い!!」
「(ドヤァ)」
「食い逃げを褒めるな香澄!!　そしてそのドヤ顔やめろおたえ、超ウゼェ!!」
市ケ谷さんは絶好調だ。
「鬼役の商店街の人達は商店街のロゴが入ったエプロンを着てます。その人達にタッチされたら捕獲扱いになるんで大人しく捕まってください」
「……もし大人しく捕まらなかったら?」
「北沢おじさんによる『北沢ブートキャンプ～根性叩き直し編～』に放り込まれます」
「お父さんの特訓の参加者は『性格が矯正される』って大評判なんだよ!!」
北沢おじさんの特訓はそんな生易しいものではないということは、1度だけ父親に連れられて見学に行ったことのある美咲は知っている。
「あとは商店街のロゴが入った法被を着た人達のタッチは捌くことが許されています。まぁ、そういう人達は基本的にベテラン参加者を相手するんで、その人達が陣取る逃亡ルートを通らなければ大丈夫です」
「美咲、そろそろ席を取らないと」
「あ、それもそうだ」
おたえの言葉に美咲は頷く。それに香澄は不思議そうに首を傾げた。
「席取りも重要なの?」
「外のテラス席の方が逃げやすいのは間違いないです。店内だと脱出口が限られてるんで、そこを潰されるとあっという間に全滅します」

「じゃあ、これだけ早く来たのって……？」
りみの言葉に答えたのはおたえだった。
「場所取りのため。戦いは始まる前から始まってるから」
「おたえはなんでそんなにガチ表情なんだよ。バンドの時でも滅多にそんな表情しないだろ」
有咲の言葉を軽く流しながら、空いていたテラス席に着く。
「へいラッシャーイ！」
「イヴちゃん！　うちはカフェ!!　カフェだから!!」
そこにやって来たのは美咲達と同じ学校の若宮イヴと『羽沢珈琲店』の看板娘の羽沢つぐみだった。
「羽沢さんがいるのはわかるけど……若宮さんもいるんだ」
美咲の言葉につぐみは苦笑する。
「ほら、今日はあの日だから……それにイヴちゃんはうちでアルバイトしているから、捕獲側だよ」
「オトーサンから、このイベントにはたくさんの強者が集まるって聞きました!!　強者との対決が『ブシドー』ってオトーサンから習いました!!」
若宮おじさんは着実に娘に悪影響を与えていようだ。
別のテラス席に座った学生のところにイヴが向かうと、つぐみが美咲達の注文をとる。
「えっと、おたえちゃんと美咲ちゃん、はぐみちゃんには必要ないかもしれないけど、メニューの説明をするね。うちのランチメニューは３種類でＡランチは育ち盛りの男子生徒用のガッツリメニュー、Ｂランチは女子生徒用の量少なめでデザート付き。Ｃメニューはバカみたいに量がある所謂チャレンジメニューだよ。全部のランチメニューで大盛りは無料だからオススメだよ」
「あ！　それじゃあ私はＢランチの大盛りで!!」
「ストップ、戸山さん」
速攻でお店側の罠にかかった香澄を美咲は止める。そしてジト目でつぐみを見ると、つぐみは苦笑した。
「あはは……一応、ルーキーに対する洗礼だから」

「だからってベテランの私とおたえがいる時にやりますか……」
相変わらずこの商店街の大人たちは容赦が無い。
つぐみと美咲の会話を不思議そうに首をかしげる香澄。
「どこが洗礼なの？」
「簡単なことです。戸山さんは食事をした後に運動して脇腹が痛くなった経験がありませんか？」
「ある!!」
「あ！　そういうことか!!」
会話を聞いていた有咲が思わず声を挙げた。
「下手に大盛りにして走り始めたら、即脇腹が痛くなって逃げるどころじゃなくなるってことか」
「その通りです。ルーキーは一部の例外を除いてこの罠にかかります」
まぁ、その例外が一緒の席に座っている電波系天然娘・おたえなのだが。
とりあえず香澄、りみ、有咲はBランチ（普通盛り）。美咲はAランチ（普通盛り）を注文する。そして最後はおたえがキメ顔で注文する。
「Aランチ大盛り、Bランチ大盛り、Cランチ大盛り。それとビッグデラックスジャンボパフェをお願い」
「お前は話を聞いていたのか!?」
おたえの注文に有咲は思わず突っ込む。まぁ、気持ちはわからなくもない。美咲も最初におたえの注文を聞いた時は正気を疑った。
だが、当の本人は不思議そうに首を傾げている。
「？　私は食べることが好きだから大丈夫だよ？」
「好き嫌いの問題じゃねぇだろ!?　それだけ食って逃げ切れるのかよ!?」
「市ケ谷さん。おたえは毎回どの店でもそういう注文して一度も捕まってないんで」
「マジかよ!?」
残念ながら事実である。
「あはは……おたえちゃんは相変わらずだね。それじゃあこれが今

回の『商店街ＭＡＰ』だから頑張ってね」
つぐみは注文をとって、商店街のＭＡＰを置いて別の席に向かう。
「商店街のＭＡＰ……？　なんか路地のところどころにバリゲードのマークがついているけど……」
「あ～、りみ。そのバリゲードのマークは本当にバリゲードが置いてあって通行止めの証拠。食い逃げ参加者は料理が出てくるまでこのＭＡＰを見て逃亡ルートを考えるの」
「そういえばどうやったら食い逃げ成功になるんだ？」
「あ、それを説明してなかったか。とりあえずこの商店街には東西南北にそれぞれ伸びる大きな通りがあって、その先に出口があります。その出口から出たところにある電柱にタッチできれば食い逃げ成功です」
美咲の説明に頷く三人。ちなみにおたえとはぐみは真剣な表情でＭＡＰを睨みつけている。
「逃亡ルートは大きく分けて３つ。特に危険な店もなくて、１番安全な北側の『イージールート』。ルーキーからベテランまで１番参加者が集まるのがこのルートです。次にこの羽沢珈琲店がある東側ルート。ここは羽沢さんのお父さんである羽沢珈琲店のマスターがいるからちょっと難易度高めです。次に南側の山吹ベーカリーがある南側ルート。こっちは山吹家が総出で守っているんで東側ルートよりさらに難易度が上がります。それで最後にはぐみの実家がある北沢精肉店の西側ルート。ここははぐみのお父さんが守るようになってから１人も脱出成功した人のいない『難易度インフェルノルート』です」
「？　なんではぐのお店のルートが１番難しいの？」
「はぐみのお父さんが人為的に引き起こした地震で体勢が崩れたところを１００ｍを８秒フラットで走ってくるはぐみがいるからです」
「……だったら逆に考えたら、今回は北沢さんがいないんだったら狙い目だったりするんじゃないか？」
「北沢おじさんはそんなに甘くないですし……はぐみ、北沢おじさんは今日、誰かに協力をお願いしたって言ってなかった？」

美咲の言葉に首をひねって考えるはぐみ。そして思い出したのか顔が明るくなった。
「そういえばみーくんのお父さんと紗夜さんと日菜さんのお父さんに依頼したって言ってた!!」
「「西側ルートはなし、と」」
はぐみの言葉に美咲とおたえの言葉がハモる。
「三人に忠告しておくと、はぐみのお父さんは元大横綱の『雷雲』で、紗夜さん達のお父さんは国際警察連合の『軍師・韓信元帥』なんで、生身ではまず逃げきれません。そこで私のお父さんですけど、普通にバトル漫画に出てくる分身の術みたいなことを使ってきます。なので今回に関しては絶対に近寄らない方がいいです」
むしろあの三人を突破するんだったら、国際警察連合の九大天王かＢＦ団の十傑集が必要だろう。
「そういえばうちのお父さんもつぐみのお父さんに協力するって今朝言っていたな」
「あのオヤジーズは素直に仕事しててくれないかなぁ」
おたえの父親が東側ルートに入ったことで、東西ルートからの脱出は不可能になった。
「残りは北ルートと南ルートなんだけど……この状況を見ると商店街側は北に人を集中させているかな……かと言って南側ルートだと『楽しい山吹一家』のテリトリーだからなぁ……」
ＭＡＰを見ながら美咲は考え込む。そして結論を出した。
「うん、どう考えてもルーキーには絶対に不可能な状況ですねぇ」
「私もちょっと心配かな」
美咲の言葉におたえも続く。
「まぁ、今回は仕方ないんで私が３人の脱出の手助けをしますよ。初挑戦が難易度神殺しなのは可哀想ですんで」
美咲の言葉に香澄は元気よく、りみと有咲は不安そうに返事をするのであった。

娘達の戦い～商店街からの脱出～（後編）

「ごちそうさまでした、と」
美咲は出てきたAランチを食べ終えて呟く。見ると他の5人も食べ終わっている。有咲だけは頭痛がするように頭を抑えているが。それが心配だったのか、香澄が声をかけた。
「どうかした、有咲？」
「いや、お前はおたえを見て何も思わないのか？」
有咲の言葉に美咲の視線もおたえのところにいく。おたえの前には空になったAランチ（大盛り）、Bランチ（大盛り、デザート付き）、Cランチ（チャレンジメニューの大盛りとか意味不明の代物）、ビッグデラックスジャンボパフェ（通常は3人くらいで食べる）、1ホールのケーキ（追加）の空になった器が置かれている。
視線に気づいたのかおたえは不思議そうに首を傾げた。だが、すぐに思い当たる節があったのか力強く頷いた。
「羽沢珈琲店のケーキはオススメ。私もお父さんによく買ってきてもらう」
「違う、そうじゃねぇ」
「ほんと!!　今度私もお父さんに頼んでみる!!」
「そうじゃねぇだろ、かすみぃぃ!!!」
（律儀に突っ込む市ヶ谷さんはすごいなぁ）
美咲のツッコミどころもどこかずれているが、口には出さなかったので有咲から突っ込まれることはなかった。
「あ、あの。どのタイミングで逃げればいいのかな……？」
どこか小動物感を出しながら聞いてくるりみに、美咲は食後に頼んだコーヒーを一気に飲み干す。
「もうそろそろ大丈夫ですよ。店側も同時にスタートできるように料理を出すタイミングとか測っているんで」
美咲の言葉に慌てて立ち上がろうとした香澄、りみ、有咲を止める。
「何で止めるんだ？」
「最初の1人目は生き残れる確率は低いんです。何せ真っ先に鬼役

から狙われるんで」
　そのために参加者達からは緊迫感が出ている。
「でも、このままじゃつぐのお父さんに捕まっちゃうんじゃないの？」
「戸山さんの言う通りです。なんで、素人がそろそろ……動いた!!」
　美咲の言葉の途中で学ランを着た男子生徒（多分中学生）が座っていたテラス席から立ち上がって逃げ出すが、路地から出て来た薬局のおじさんによって捕獲されていた。
「うぉ……マジかよ。あの人の動き見えなかったぞ」
「市ヶ谷さん。鬼役を見るのもいいですけど、周囲を見てください」
「周囲？　……うわ!?　みんないなくなってる!?　おたえとはぐみまで!?」
　有咲の言葉の通りにテラス席にいた学生達はみんないなくなっている。やっていることはアホの極みだが、やっている方はガチなのだ。
「おたえちゃんとはぐみちゃんはどこに行ったのかな……」
「おたえは裏路地通って南側の出口を目指すみたいですね。はぐみはさっきの学生が捕まった瞬間にその上を飛び越えて行ったんで、東側ルートですかね。ひょっとしたら東側ルートの路地から北側ルートに出られる道が今回はあるんでそっち狙いかもしれませんけど」
「見えてたのか!?」
　有咲は驚愕の表情で美咲を見てくるが、これはこのゲームの必須技能だ。
「他の参加者は味方であると同時に敵なんで、どっち方面にどれくらい向かったかは把握できた方がいいですよ。同じ方面にベテランがいると、協力したり囮に使ったり使われたりするんで」
「……恐ろしいゲームだな」
「今回は南におたえが行ったんで、南側ルートに結構流れましたね。それじゃああたし達も行きましょうか」
　美咲も羽沢珈琲店から出てくる参加者達の流れ（店内ではすでに羽沢おじさんの無双が始まっているようだ）に乗るように三人を促して

中央広場に向かう。
「なんで中央広場に出るの？」
「いえ、まぁ。これは私のやり方なんで真似しなくてもいいんですけど、中央広場に出ると、四方のルートが全部見渡せるんですよ。それで実際に配置されている人員を確認してから、逃亡ルートを決めるのが私のやり方なんで」
香澄の質問に答えながら美咲は中央広場に出る。その瞬間に飛んできたバゲットを1本掴んで、同時に三人を狙って飛んで来ていたバゲットを叩き落とす。
「あ、とりあえず南側ルートから死角になる中央広場の柱の陰に隠れてもらえますか？」
「いや。いやいやいや!!　なんだよ!?　なんでバゲットが飛んで来てんの!?」
美咲は飛んでくるバゲットを叩き落としながら、騒ぐ有咲を柱の陰に押し込む。目をキラキラさせている香澄と困惑しているりみも一緒に押し込むのを忘れない。
バゲットの投擲者もターゲットを別にしたのか、美咲達の方へ投げてこなくなった。美咲は顔見知りの参加者（男子高校生）に斬りはらいの武器としてバゲットを投げ渡して、柱の陰に隠れる。
「ちょっと待ってくれ。あのバゲットはなんだ？」
「なんだって言われても、パンとしか言いようがないんですけど」
「パンは叩いた時に金属音は出ねぇよ!!」
「私も山吹ベーカリー以外のパンであの音は聞いたことないですねぇ」
「……え？　沙綾ちゃんのお店のなの？」
りみの言葉にちょっとだけ顔を出させて南側ルートを覗かせる。
そこには道の中央に陣取って参加者に向けて鈍器のバゲットを投げつけている沙綾の姿があった。先ほど美咲が武器をあげた男子高校生も同時に4本飛んできたバゲットを捌ききれず、お腹に直撃してうずくまったところを山吹家チビッ子達に捕獲されていた。
「……ええ、沙綾……マジかよ……」

「わぁ!!　さーやすごい!!」
「それどころじゃないよ香澄ちゃん……」
本気で唖然としている有咲。ずれた感想を言う香澄。それに突っ込むりみという状況になっている。
「山吹おじさんがいない……あぁ、なるほど。東側ルートが逃げやすくなっていると思ったら山吹おじさんと花園おじさんを配置していたわけだ」
先ほど、一瞬だけ東側の路地から花園おじさんが飛び上がっている姿が確認できたし、東側ルートには南側ルートとは比べられない精密差でバゲットが飛んでいる。確実に山吹おじさんが出口付近で獲物を狙撃しているのだろう。
「やっぱりおたえの感はバカにできませんね。危機察知能力が半端じゃない」
「そう言ってる場合か!?　私達はどうするんだ?　北側ルートはスッゲェ人いるぞ!!」
有咲の言う通り、北側ルートには大量の人が配置されていた。
「このまま北側ルートで行きます」
「マジか!?　あの人数だぞ!?」
美咲の言葉に有咲は信じられないものを見る表情で美咲を見てくる。だが、美咲にだって理由はある。
「北側ルートの人員を見るに、厄介なのは指揮官役のリサさんだけです。他は見たことない人が多いんで、新米鬼役が多いと思います。その分、慣れた鬼役は他のルートに配置されていると思うんで、難易度はさらに高いです」
北側ルートの中央にはリサがコンビニの制服に商店街のロゴの入ったエプロンを着て、北側に配置された人員を動かして参加者達を捕獲させていた。
「リサさん、容赦ねぇな。1人に対して3人で囲ませてるぞ」
「逆に考えると、スリーマンセルで動かさないといけないくらいの経験者しかいないってことですよ」
気をつけなきゃいけないのはリサと同じバイト先で、食い逃げ常連

のモカだが、参加者側にも鬼役にも姿が確認できない。不確定情報で動きたくないが、今回の美咲にはルーキー3人の面倒も見なきゃいけない。あまり時間をかけすぎるとそれぞれの持ち場を殲滅したオヤジーズが集まってくる可能性が高いので、時間はかけられない。

「仕方ない、か。戸山さん、りみ、市ヶ谷さん。私が北側ルートの鬼役を引きつけるんで、それぞれの判断で突破してください。最初の予定だと上手く案内できるかと思ったんですけど、想定外に厳しいんでそれぞれ頑張ってみてください」

「うん!!」

「わ、わかった。頑張ってみるね」

「それは大丈夫だけどよ……奥沢さんは大丈夫か？　あの人数だぞ？」

香澄は元気よく、りみは不安そうに、有咲は逆に美咲を心配してきた。

（なるほど。おたえが言ってた市ヶ谷さんがツンデレだって言うのは事実だったわけだ）

「あ、なんか今、無性に腹が立ったんだが」

「気のせいですよ」

美咲の考えを読んだかのように発言した有咲を流し、美咲は北側ルートに突入する。鬼役の手をギリギリで避けながら鬼役の集団を掻き乱す。美咲の動きに釣られて鬼役のフォーメーションが崩れる。それを待っていたかのように他の参加者も北側ルートに突入してくる。ここまで残っているということはベテラン組だろうか。

「12班と15班だけで美咲を追って！　他は隊列崩さないで食い逃げ犯人を捕まえる!!」

リサの指示に鬼役の方に規律が戻りそうになるが、美咲は再び鬼役の集団に飛び込んで釣り出す。美咲のおちょくるような動きにムキになって追いかけてくる鬼役達。

（これ以上釣り出すのは無理かな）

美咲はそう判断すると、最初から目をつけていた細い路地に入る。後ろからは結構な人数が追ってきている気配がする。

「このままだと逃げ切られるぞ!!」
「大丈夫！　この路地はバリゲードで封鎖されているはずだから!!」
「そんなの百も承知ですよ、と」
鬼役達の言葉に美咲は呟く。そして角を曲がって鬼役から見えなくなった瞬間に、細い路地に立つ建物の壁を交互に蹴りながら建物の屋上に飛び移る。
「あれ!?　いないぞ!!」
「嘘でしょ!?　どこ行ったの!!」
「……鬼役の新人だったのかな」
細い路地で美咲を見失った鬼役の集団を見て美咲は呟く。はぐみのように垂直飛びで屋上に飛び移るバグを筆頭に、美咲やおたえのように壁ジャンプで屋上まで上がる参加者は多い。身体能力凡人のベテランだって各所に設置されている梯子を使って屋上に上がるのは普通である。その証拠に北側ルート以外の逃亡ルートでは屋上でも攻防戦が起きている。
美咲がざっと他のルートを確認すると、西側ルートでは見るからにヤンキーの格好の高校生達が美咲の父親と氷川おじさんを相手に屋上で逃亡を測っては即捕縛されている。多分、地上ルートは北沢おじさんの独壇場なのだろう。東側ルートは山吹おじさんのバゲット狙撃で動きが止まった参加者が屋上で待機している鬼役に捕獲されている。やはり1番安全だったのは南側ルートだったのか、屋上にも人がいない。このまま南側ルートに変更することが美咲にとっては逃げ切るのに1番いいかもしないが……
「まぁ、面倒みるって約束しちゃったしね」
とりあえず3人のいる北側ルートに戻る。もし生き残っているようだったら援護をしてあげることもできると考えながら屋上を飛び移りながら北側ルートに戻る。商店街の建物の間隔は短いので、恐怖心さえ克服すれば凡人でも行ける距離である。
北側ルートが見える建物まで戻ったところで美咲の背後から手が伸びてくる気配を感じ取る。瞬間的に回避しようとするが、視界に

入った法被を確認した瞬間に美咲は避けることから伸びてきた手を捌きながら合気道の用量で相手を投げる。
美咲が投げた相手も空中で体勢を立て直して着地していた。そして笑いながら美咲に挨拶してきた。
「よ、美咲」
「宇田川さんですかぁ……」
気軽に挨拶してきたのは宇田川おじさんの長女・巴だった。
「宇田川さんって法被でしたっけ？」
「うん？　あぁ、今回からな。前回、食い逃げ成功させた奴が多かったからさ、商店街会長が張り切っちゃってさ。結構な奴が法被着てるよ」
つまりただでさえ武闘派な商店街の面々がさらに強化されているわけである。ちなみに法被を着ている鬼は食い逃げ犯に怪我をさせないように無力化して、捕獲した証拠である手錠をつけなければならない。そのために法被鬼は手錠を何個も持っているのだが……
「宇田川さん、手錠は1個ですか？」
「まぁな。さっきまで沙綾の手伝いで南側ルートにいたからさ。たえ以外は全員捕縛できたんだけどなぁ」
南側ルートの掃討が終了したので、北側ルートの手伝いに来たらしい。南側ルートが掃討されたと言うことは、沙綾もフリーになったということなのでバゲット狙撃が北側ルートにも飛んでくるということだ。
「あ、ちなみに美咲が面倒見ていた3人はリサさんに追い込まれた所に待機してたモカに捕獲されたぞ」
「なんであたしが面倒見てたこと知ってるんですかねぇ」
「つぐが情報を回してくれたからな。だから、美咲を狙うのは最後になった。美咲の親父さんが、美咲は3人を逃してから本格的に逃げるって予想してさ」
「ファッキンファーザー」
完全に父親に動きが読まれていた。
「それじゃ……行くぞ！」

その言葉と同時に巴が１０ｍはあった距離を一瞬でつめて美咲に拳を繰り出したり、引きづり倒そうとしてくる。美咲は北側ルートの出口に向かって下がりながら、巴の攻撃を全て捌いていく。一瞬でも気を抜けば即ゲームオーバーの状況である。

建物の端に辿りついたので、次の建物に飛び移った瞬間に美咲に寒気が走る。

それと同時にほぼ同時の竹刀２段突きが美咲に向かって飛んでくる。相手が法被だったのを瞬間的に判断して、美咲は最低限の動きで回避する。

「ミサキさんはスゴイです!!　突きを回避した上に、予備で腰に下げていた竹刀を折られてしまいました!!」

「若宮さん、殺意高くない？」

素直に賞賛してくる法被装備の日本とフィンランドのハーフのイヴ。法被鬼と判断した瞬間に予備武器破壊の蹴りを入れた美咲の言えた義理ではないが、殺意が高い。

「オトーサンの出す『クズリューセン』には届かないですが、私の突きを回避できたのはヒナさんに続いて２人目です!!」

「一般人には出さないほうがいいですよ。高確率で病院送りになるんで」

テンションの高いイヴに答えながら、美咲は逃亡ルートを考える。

「考え事とは余裕だな……と!!」

「そうでもないですよ……!!」

追って来た巴の攻撃を捌きながら別の屋上への逃亡を狙うが、イヴがそれを牽制してくる。美咲の救いは巴とイヴが連携を取れていないことだろう。連携を取られていたらとっくに美咲の腕には手錠がつけられているだろう。

美咲は大振りになったイヴの一撃を回避して蹴りで竹刀を破壊。そして援護のために割り込んできた巴の拳を受け止め、その勢いを利用して美咲達がいた北側ルートの反対側の建物に向かって跳躍する。もちろん、沙綾からのバゲット狙撃が来るが、山吹おじさんの理不尽バゲット狙撃と違って、来ることがわかっている狙撃なら対処するこ

とは可能なので、空中でバゲットを手で捌きながら反対側の建物に降り立つ。誰かがいることはわかっていたので、法被鬼だと判断して迎撃しようと蹴りを放とうとする。

「うっそでしょ!?」

美咲の視界に入ったのはまさかのエプロン鬼。法被鬼だったら問題にならない蹴りだが、エプロン鬼だった場合は洒落にならない事態になりかねない上に、触れられたら捕獲なので慌てて回避する。

「あいた!!」

美咲が回避したことでベチャリと倒れ込んだのはファーストフードの制服を着てエプロン装備の彩だった。

「え～い!!」

美咲はさらに飛びかかってきた人間を回避する。法被鬼なら迎撃一択だが、この状況だとエプロン鬼の可能性があるので、回避できるなら回避した方が確実だ。

それは正解だったようで、美咲に飛びかかってきたのは彩と同じ制服を着たひまりであった。

「う～、もうちょっとだったのに……」

「彩さん、もう少しですから頑張りましょう!!」

「なんでこのタイミングで一般人枠の上原さんと丸山さんが来るんですかねぇ」

美咲の質問に答えたのは地味に美咲の逃げ道を潰しているエプロン鬼のモカだった。

「リサさんの指示でね～。法被鬼のトモちんとイヴちゃんをくぐり抜けた直後にエプロン鬼が行けば判断が遅れるってことらしくてさ～」

「そのせいで丸山さんの顔面に蹴りを叩き込むところだったんですけど」

「あちゃ～、彩さんの顔面が潰れるところでしたね～」

「私はそんな危険だったの!?」

今更ながらに自分の身に迫っていた危険を教えられ、驚愕している彩。美咲的にもこんなに心臓に悪い罠を張らないで欲しい。ガチで

大怪我を負わせるところだった。
「まぁ彩さん!! あとは巴とイヴちゃんに任せましょう!!」
「任された!!」
「任せてください!!」
ひまりの言葉に当然のように距離のある北側ルートを飛び越えてくる巴とイヴ。しかもイヴは空中で竹刀の代わりの武器になるバゲットを沙綾から受け取っている。
巴とイヴの攻撃を捌き、受け流し、バゲットは隙をついて破壊する。だが、巴とイヴはお互いに邪魔にならないように交代しながら攻撃をして来て、破壊したバゲットもすぐさま沙綾によってパスされてくる。彩とひまりは素人丸出しの包囲をしているが、それをカバーするようにモカが美咲の逃亡ルートを防いでいる。流石は食い逃げベテランである。逃亡者のことを熟知している。いっそのこと一か八かで北側ルートに降りようとおも思ったが、すでに美咲達がいる建物はリサの指示によって包囲されていた。
「本気すぎませんかね……!!」
「会長からたえか美咲は確実に確保しろって指示が出てるんでね!!」
巴の一撃を捌き、背後から飛んできたバゲット斬撃を回避する。そろそろ美咲の体力が限界になってきたので、武器破壊する余裕もなくなってきた。
「この手は使いたくなかったんですけどね……」
動きの止まった美咲に距離を詰めてくる巴とイヴ。しかし、美咲は動じることなく逆転の一手を叫ぶ。
「助けてお父さん!!」
美咲が叫んだ瞬間に巴は北側ルートの反対側の建物に投げられ、イヴが持っていたバゲットは粉々になった。
そして美咲を守護するように立っていたのは美咲の見慣れた後ろ姿。
「無事か、美咲」
「うん、大丈夫」

美咲の父親だった。美咲の予想通りに近くにいたらしい。おそらくは巴とイヴと美咲が危険な領域の戦闘に入った時に無力化する役割だったのだろうが、美咲はそこを利用させてもらった。

すなわち、この親バカは助けを求めたら確実に助けてくれるということである。

事実、美咲の予想通りに本来の役割を投げ捨てて助けてくれた。

「お父さん、あたしを守ってね」

「パパに任せとけ!! さぁ、今の俺は阿修羅を凌駕する存在だ!!」

「何をやってるかこのバカがぁぁぁっぁぁぁ!!!!」

美咲が逃亡を開始し、父親が叫んだと同時に花園おじさんの一撃が父親に叩き込まれたようだ。人体からは絶対に出ないであろう轟音が響きわたった。

だが、人外同士の戦いに巻き込まれるのは勘弁なので後ろは振り返らない。むしろ花園おじさんが父親と同時に病院送りになってくれると美咲の心労が減る。

『バカかお前は!? 俺たちは鬼側だろうが!! 参加者の逃げるのを手助けしてどうする!!』

『はぁ!? 何を言ってるんですかぁ!! 娘を助けるのはパパの義務ですから!! 花園だって地味にたえちゃんの逃亡のサポートをしていただろうが!!』

『バ!? あれはサポートじゃねぇから!! 俺が掃除したところをたまたまたえが通っているだけだから!!』

親バカ同士のくだらない口喧嘩と一緒に凄まじい轟音が商店街に響いている。美咲がチラリと確認すると、モカは彩とひまりを連れて退避し、リサも包囲していた鬼役全員を離れさせている。

「ま、あれだったら怪我人も出ないでしょ」

美咲はそう呟きながら北側ルートのゴールの電柱まで飛び降りたのだった。

ちなみに父親と花園おじさんによる怪獣大決戦は『生きたバグ』の

氷川おじさんによる蹴りと、『現代の雷電為右衛門』と呼ばれる北沢おじさんによる張り手によって双方ＫＯとなった。

美咲、未知との遭遇～パパ達の同級生～

美咲はＣｉＲＣＬＥの前にあるカフェでパスパレのメンバーである白鷺千聖と大和麻弥と一緒に紅茶を飲んでいる。このＣｉＲＣＬＥに併設されたカフェは盆栽があったりヤシの木があったり足湯等が頻繁に入れ替わる謎の多い店だが、ＣｉＲＣＬＥのオーナーが自分の父親だった時点で美咲は考えることを辞めた。多分、真面目に考えたら胃が死ぬ。

向かい側には子役から活躍する若手女優・白鷺千聖がゆっくりと紅茶を楽しんでいる。その姿は父親である白鷺おじさんそっくりであったが、美咲は口に出さない。出したら間違いなく機嫌を損ねて帰ってしまう。

ちなみに麻弥は千聖が美咲に声をかけた時点で嫌な予感を感じ取ったのか巻き込まれた形である。

「それで？　美咲ちゃんは何の用事かしら？」

千聖の言葉に美咲は黙って白鷺おじさん主導の『Ｂｅａｒ　Ｗａｒｓ』の台本を渡す。それを千聖は開くこともせずに大和印の自走式ゴミ回収ロボット・タベルンデスに放り込みながら再び微笑しながら口を開く。

「それで？　美咲ちゃんは何の用事かしら？」

「残念ながら台本を捨てても現実は変わりませんよ」

美咲の言葉に千聖は頭痛を抑えるように頭を抱える。

「美咲ちゃんは私があの人と共演したくない理由はわかるわよね？」

「当然です」

親バカの父親とテレビ共演とか拷問以外の何者でもない。特に千聖は父親と同じ職業についているから取り扱い注意なのだ。

「だったら頼まれる時点で断られるのわかっているわよね？　それで何で受け入れちゃうの？　美咲ちゃんの時点で断ってちょうだい」

「はは、白鷺先輩は面白いことを言いますね。あの人達が私のいうことを聞いてくれるとでも？」

「……ごめんなさい」
「辞めてください。謝らないでください」
「いや、本当にごめんなさい。そうだわ、今度パスパレとハロハピのみんなと一緒に旅行にでも行きましょうか」
「露骨に優しくしないでください。私の心が死んでしまいます」
やはり他の親バカメンバーから見ても美咲は生贄扱いだった事実に格ゲーの弱パンチ連打のダメージを心においながらも美咲は何とか持ち直す。
二人のやりとりを苦笑しながら見ていた麻弥が今度は口を開く。
「千聖さん。多分ですけどその仕事断る方が難しいっすよ。千聖さんのお父さんがジブンのお父さんにス〇ーデストロイヤーの製作を依頼してたっすから」
「待って。あの人はどこまで迷惑をかけるつもりなの」
「ちなみに白鷺先輩。金銭面は天下の弦巻家。政治面ではうちのお父さん。アクションには氷川おじさんの伝手を使うつもりらしいんで諦めた方がいいですよ」
美咲に協力を依頼してきた白鷺おじさんの時点でこれだけ決まっていたので、現在はどこまで行っているかわからない状況である。だから美咲は素直に諦めた。
「……どうにかならないかしら？」
「多分無理ですよ」
美咲の無慈悲な言葉に千聖が机に沈む。嗚咽を漏らしているようだが少しすると起き上がった。
「はぁ……あの人と一緒に仕事をすると私の羞恥心が大変なことになるんだけど……」
「でも千聖さん。ライブに観客として来られるよりはマシじゃないっすか」
麻弥の言葉にそれはそうかと頷いている千聖。その思考は完全に親バカに迷惑をかけられる前提の話だが美咲は否定しない。だって一番の被害担当娘だからだ。
「うん？　そこにいるのは麻弥か？」

その言葉に現実逃避をしていた美咲と千聖の視線が自然に集中する。そして絶句した。
その人物の体は銀色に輝いていた。どこも出ずにどこも引っ込まないプロポーション。今時の小学生だって『ロボの絵を描け』と言われたらもっとマシなデザインになるであろうドラム缶のような体に玩具みたいな手足。それがスーツを着て歩いていた。
いくら非常識体験を多く体験している美咲も流石にこれは未知との遭遇だ
「あ、メカ沢さんじゃないっすか」
そんな非現実的な相手に普通に挨拶する麻弥。
「こんなところでどうしたんだ？」
「ほら。白鷺さんからの依頼の件を白鷺さんの娘さんに話していたっす」
ごく普通に一般人に会話するようにメカ沢さんと呼ばれたドラム缶と会話する麻弥。美咲と千聖のＳＡＮ値がピンチ。
「あぁ。あの〇ターデストロイヤーの製作依頼か」
頭に油のようなものを指しながら言葉を続けるメカ沢。
「俺は大和には感謝してんだ。俺みたいな不良でバカな奴を友人ってだけで雇ってくれているんだからよ」
いや、大和おじさんはそれ以外にも絶対に『実験台』としても雇っていると美咲は思う。
「だけどよ。大和の研究所でハイテクに囲まれて仕事をしていると考えちまうのさ」
（（貴方がハイテクの塊みたいですけど!!））
美咲と千聖の心は間違いなく一致した。だがそれに気づかずメカ沢は言葉を続ける。
「オレ機械が苦手だからよ。それだから余計に感じちまうことなのかもしれねぇ」
それはサッカー選手がサッカーボールに苦手意識を持つのと同じではないだろうか。
「大和の研究のおかげですげぇ発展しているし、すげぇ便利だ。け

どよ、オレはそういう機械に頼りすぎて、デジタル化された世界って好きじゃねぇんだよな。やっぱそこに心が通じ会わなきゃすげぇ虚しいと思うんだよ」
そしてメカ沢は机を叩きながら悔しそうに言う。
「このままじゃオレ達は機械に支配されちまうぜぇ!!」
……
((それはひょっとしてギャグで言っているのか!?))
「おっと、お二人とも飲み物が切れてるっすね。メカ沢さん。ちょっと行ってきますね」
「うん？　おぉ、そうか。それじゃあこれを使いな」
そう言って玩具の手から出されたのは一万円札。
「お釣りはお前達でわけな。普段からあいつらに振り回されているからな。ダチからの慰謝料だと思ってくれや」
「メ、メカ沢さん!!!」
なんと言う漢気。美咲と千聖は思わず叫んでしまう。むしろ父親達の友人にこんな人格者……うん、メカ格者がいることに美咲は驚きだ。
三人でメカ沢さんにお礼を言ってレジへと向かう。
「麻弥ちゃん。あの人……うん、あの人は？」
一瞬だけ人あつかいすることに躊躇したが、結局人間扱いした千聖は麻弥に説明を求める。麻弥も苦笑しながら口を開いた。
「お父さんの研究所で働いている職員の人っす。なんでも高校時代の同級生だったとか」
「……大和おじさんが作ったわけではないんですか？」
美咲の言葉に麻弥は首を振る。
「ジブンも小さい時はそう思ったんすけど、お父さんに高校時代の写真を見せられて納得したっす」
そこで美咲は一つの記憶を思い出す。
「ちょっと待ってください大和さん。その写真って他にゴリラとかフレディとか写ってませんでしたか？」
「あ、その写真っすね」

なんと。父親の冗談だと思っていた高校時代の同級生話はガチだったらしい。と言うかゴリラとかフレディがいる高校ってどんなところだ。

『不法投棄発見!!　不法投棄発見!!』

『うん？　こいつらは確か大和が作った……な!?　おいやめろ!!』

『不法投棄ハイケナイコトデス!!　不法投棄ハ禁止事項デス!!　ゴミヲ回収シマス!!』

大和印の自走式ゴミ回収ロボット・タベルンデスに回収されてしまうメカ沢さん。それを黙って見送る美咲、千聖、麻弥の三人。

そしてゴミ収取車にメカ沢さんが放り込まれて運搬されるのを見届けてから麻弥はスマホを取り出して電話を始める。

「あ、お父さんすか。メカ沢さんがまたゴミと間違えられて……うん、そうっす。それじゃあよろしくっす」

それだけ伝えて電話を切る麻弥。そしてどこか遠い目をしながら千聖が口を開く。

「珍しいことじゃないのね？」

「メカ沢さんが外に出ると高確率っすね」

とりあえず三人で見なかったことにしてそれぞれ飲み物を買って元の席に戻る。

「おや。見慣れた顔がいるねぇ」

そこにタイミングよく声をかけてきた無精髭にトレンチコートを着崩した男性。千聖と麻弥が不思議そうにしているなかで唯一知っている美咲が口を開く。

「今井おじさんじゃないですか」

「やぁ、美咲ちゃん。久しぶりだねぇ」

「言ってもそれほど久しぶりじゃないですけどね。今回はお父さんに仕事を斡旋してもらったって聞いてますけど」

やってきたのは世界を股にかけて何でも屋をやっている今井おじさん。ロゼリアの今井リサの父親である。だが、その見た目はくたびれたお父さん像そのもので、性格も合わさってダメ親父そのものであった。

「いやぁ、久しぶりにリサに本気で怒られちゃったからねぇ。だから大きい仕事を片付けようと思って奥沢に頼んだら、まさかロアナプラに行かされるとは思っていなかったよ」
「……あれ？　それって犯罪都市で有名な……？」
美咲の言葉に今井おじさんは疲れた笑顔を見せながら答える。
「そう。そこそこ。三合会とホテル・モスクワがちょっと力持ちすぎたからちょっと削ってこいとか無茶ぶりだよねぇ」
美咲にはその二つの名前がマフィアだったと父親から聞いている。疑問を上げようとした麻弥を視線で制す。自分から地雷原に突っ込む必要はないのだ。
「まぁ、最終的に三合会とは話し合いで済んだけど、ホテル・モスクワとは遊撃隊と喧嘩になったからなぁ。荒事は苦手なんだけどねぇ」
「……よく生きてられましたね」
「なに。氷川とか若宮を相手にするよりは千倍は楽だったからねぇ。それより美咲ちゃん達はどうしたんだい？」
とりあえず今井おじさんの方から話を変えてくれたので大人しくそれに乗っかる。深入りは危険だ。
そして白鷺おじさんの野望（千聖視点）を話すと、今井おじさんはタバコに火を点けながらどこか納得していた。
「あぁ、それなら俺にもガンアクションの指導をして欲しいって話が来てたよ。出演者も上原のところから借りるって話だ」
今井おじさんの言葉に千聖は机に沈むのであった。

おくさわけ！～終末特異一家「奥沢家」～

『朝だぞオラァァァァァ!!!!!!!!』

父親が用意したお手製目覚まし（ＣＶ若本）を壊すように叩いて美咲は目覚める。使っている美咲が言えた義理ではないが、娘に対してこんな喧しい目覚ましを用意するとか父親は頭が大丈夫なのか心配するが、すでに手遅れだったとも思う。

「あぁ、今日もこころ達に振り回されるのかぁ」

朝からダウナーな気持ちを隠さない美咲。しかし、そこは頭のおかしいオヤジーズの相手をするよりかはマシかと考えを改めるあたりに彼女の末期具合が伺える。

制服に着替えて下に降り、リビングに入る。すると台所で母親が朝食の準備をしていた。

「お母さん、手伝おうか？」

美咲の言葉に白い着物を着てピョコンと跳ねたアホ毛が特徴的な母親が微笑みながら振り向く。

「おはよう、美咲。お料理の方は大丈夫だからアマ公にご飯をあげてくれるかしら」

美咲の母親である奥沢式。白い着物を着た完全美人でアンニュイで穏やかな性格が近所でも評判の美人ママ。美咲や妹と一緒に出かけると姉妹にしか見られないために父親に対して『氷川おじさん、犯罪者です』といいかけるが、この見た目で父親より年上の姉さん女房らしい。父親に「本当にやばくなったら母さんを頼れ。どうにかしてくれるから」と教えられて以来、美咲の中では一番逆らっていけない人になっている。

美咲は台所からペットフードを取り出すと、リビングから庭に出る窓ガラスを開けて声をかける。

「アマこ～、ご飯だよ～」

「ワン!!」

美咲の言葉に嬉しそうに駆け寄ってくる真っ白な体に紅い隈どりをした犬。名前をアマ公と言って奥沢家で飼われている犬である。

奥沢家で飼われているだけに普通の犬ではなく、アマ公の近くで「今日は晴れるといいなぁ」と呟くと曇っていたはずなのに太陽が出たり、散歩の途中で「ここに橋があれば便利なのに」と呟くと突然橋がかかったりすることが頻発するワンコである。

性格は惚けた態度をとることも多いが、美咲や奥沢家の人々を心配するなど心優しい一面がある。

視界の片隅に映る大木に吊るされた父親を見ないようにしながら美咲はアマ公にご飯をあげる。妹とアマ公だけが美咲の数少ない心の癒しである。

ご飯をあげ終わって美咲がリビングに戻るとちょうど中学の制服を着た妹が入ってきたところだった。

「おはよう、久留里」

「ん」

口数少なく返して美咲に挨拶してくる妹の奥沢久留里。調子の良い父親に似ないで口下手だけど美少女中学生。その美少女っぷりは芸能人にスカウトされるほど（ちなみにスカウトいた事務所は父親によって潰され、所属芸能人は上原おじさんの事務所に吸収された）。無駄遣いが嫌い（ここも父親と違う）で節約も大好き（見習えお父さん）スーパーなどの特売のチラシをチェックすることが趣味。中学に上がってからはお弁当作りも趣味になり美咲のお弁当も頻繁に作ってくれる（父親に作った最初のお弁当は両親によって特殊な防腐処理がされて両親の部屋に飾ってある）。

「あら、久留里も起きたのね。それじゃあ朝ごはんにしましょうか」

「お父さん……は？」

母親の言葉に独特な言葉遣いで聞く久留里。美咲が黙って庭を指差すと納得したのかムフーと頷いて席に着く。美咲も席について母親も食卓に座ってみんな一緒に

「「「いただきます」」」

今日も奥沢家は平和である。

涙のスマイルドーター～決戦は体育祭～

体育祭である。これが共学だったら運動が得意な男子は女子に良いところを見せようとして空回りし、運動が嫌いな生徒は当日に台風で中止にならないかお願いするイベントである。

だが美咲が通学する花女は女子校。そんなやる気になる人なんかいないだろうと思っていた。

当然のように美咲の願いは届かない。

某弦巻家の娘が「どうせだったら楽しくやりたいわ！　そうだわ！お父様に頼んで豪華景品を用意しましょう!!」とか言い出したせいで勝利チームには女子高生垂涎のご褒美。そしてＭＶＰには金一封が贈呈されることになった。

残念ながら美咲が止めるまもなく某弦巻家の娘が父親に連絡を取ってしまったために無茶な要望が通ってしまった。

そして問題は花女が『地元密着』を謳っている学校ということだ。体育祭や文化祭などは地域住民達が見学したり、参加できる競技があったりする。

そのチャンスを逃すような親バカは美咲の知り合いにはいない。当然のように巨大な陣地を奪っている弦巻家領域には美咲には見覚えのありすぎる顔が集まっている。

というか氷川おじさんはいていいのか。朝のニュースで香港にＢＦ団が現れたとか言ってたぞ。

ちなみにチーム分けは

赤・はぐみ、沙綾、イヴ、有咲、彩

白・美咲、香澄、りみ、たえ、こころ、紗夜、花音、千聖

白組に美咲の知り合いが多く集まっているが、赤組には『運動神経化物』のはぐみがいるから戦力差はほぼない。なにせはぐみが「勝ったら負けた方が可哀想」理論は北沢おじさんによって「真剣勝負で手を抜くことなどあり得ない」という教えによって容赦がなくなっている。これに対抗するには『スーパーチートパッパ』の娘である紗夜を生贄にするしかない。

「……美咲さん。何か不穏な気配を感じたんですが」
「気のせいですよ、紗夜さん」
なかなか勘が良い生贄である。隣に立っている紗夜のジト目をさらりと流す美咲。
「う～ん!!　はぐが赤組って強敵だね!!」
「香澄ちゃん……強敵ってレベルじゃないよ……」
香澄の笑顔の言葉にりみが自信なさげに言う。言いたいことはわかる。どう考えても走る系の競技になると対抗できるのは紗夜さんだけだ。美咲とたえも走りでははぐみに勝てない。
「あの人達がいるだけで今年の体育祭がこんなに不安なものになるなんて……」
「だ、大丈夫だよ千聖ちゃん!!　他の人もいるからお父さん達も無茶なんかしないよ!!」
花音の見事なフラグ建築を美咲はどこか遠くで聞いている。連中がやると決めたら一般人の迷惑なぞ気にせずに思いっきりはっちゃける。そのことを長いあいだ振り回されてきた美咲は知っている。
そして有咲の選手宣誓によって始まる競技。まず徒競走。これは圧倒的な速さではぐみがトップ。地味に日本新記録が出て北沢おじさんの自慢が応援席まで届いたが美咲はこれをスルー。次の玉入れでは美咲とたえの二人でりみに集めてもらった玉をカゴに向かってまとめてダンクして圧倒的勝利を取った。赤組ではバゲットスナイパー沙綾とハーフ武士娘イヴがいたが、二人は投げ入れると言う行為が得意ではなかったのか勝利となった。
そして1年生のダンスで事件は起こる
「……なんでいるんですか白鷺おじさん」
「千聖にいいところを見せようと思ってね!!」
殺したい、この笑顔。
美咲の心情を余所に他の女子生徒は世界的有名なイケメン俳優と踊れることに喜んでいる。だが応援席にいる千聖の羞恥心は大変なことになっている。
そして始まる音楽。素人に混じってキレッキレの踊りを披露する

白鷺おじさん。そして終わった直後に千聖に投げキッスを忘れない。羞恥心がブレイクした千聖はどこかへ走りさった。
「恥ずかしがる千聖も最高に可愛いと思わないかい、美咲ちゃん」
「その超ポジティブ思考はなんなんですか」
白鷺おじさんの言葉に半目で突っ込む美咲。しかし白鷺おじさんはイケメンに笑いながら観客席に戻っていった。あ、他のオヤジーズと一緒に祝杯を挙げている。
そして昼食。オヤジーズの襲撃を警戒した美咲だったが、それは杞憂に終わる。
なにせ午後一である住民参加型競技である『棒倒し』の準備にオヤジーズ総出で取り掛かっているからだ。
「な、なぁ。奥沢さん。あれって……」
「棒倒し用の棒ですよ、きっと」
「クレーン車で運ぶような石柱で棒倒しをやるつもりなのか!?」
一緒に昼食を取っていた有咲渾身のツッコミである。だがあのオヤジーズが参加するとなれば普通の棒では衝撃波だけで倒れてしまうので競技にならないから仕方ないのだ。
そして始まる住民参加型競技『棒倒し』
『さぁ、やってまいりました花咲川女子学園体育祭名物住民参加型競技。今年は棒倒しが行われます。実況は私花咲川女子学園に咲く二輪の花、牛込姉妹の父である私がやらせていただきます。解説は一度も奥沢と氷川に勝ったことがないにも関わらず将棋界で神とか呼ばれてイキっている戸山にお願いしております』
『なぁ、今流れるように俺のことディスらなかったか?』
ついに実況と解説にオヤジーズが侵食し始めた。この体育祭はもう終わりだな。美咲はどこか諦めた気分でこれから始まるオヤジーズの暴走を眺める。逆に考えれば自分が巻き込まれないだけマシだと考えればいいのだ。そう考えるだけで少し楽になる。
『さぁ、まずは赤組からの入場です!! おっと先頭にいるのは角界の元大横綱・雷雲が威風堂々と入場です。そしてその隣には現代のラストサムライ若宮もおります!! これは中々の威圧感です!!』

その光景はさながら北沢おじさんと若宮おじさんに率いられた軍勢といったところだろうか。山吹おじさんと丸山おじさんがいないのはきっと目を離したら行方不明になる松原おじさん対策だろう。そう思って美咲がオヤジーズの陣取っている場所を見ると松原おじさんを囲むように山吹おじさん、丸山おじさん、白鷺おじさんがいた。鉄壁の守りだ。

『そして次は白組の入場です!! おぉっと!! これは凄い!! 流石は天下の弦巻財閥総帥!! なんと神輿の上に豪華な玉座に座り、それを部下達に担がせての入場です!!』

「まぁ!! お父様かっこいいわ!!」

「弦巻おじさん……なにやってるんですか……」

こころの歓声と美咲のボヤきは同時であった。

「あれ? お父さん達がいない」

たえの言葉に美咲と紗夜が思わず白組の方を確認すると、確かに美咲の父親と花園おじさん、氷川おじさんの三人組がいない。

『それでは競技スタァァァァト!!!!』

牛込おじさんの言葉に用意されていた銅鑼が鳴らされ、美咲達の疑問が解消されずに競技が開始してしまう。お互いに様子見なのか、攻めていくその他大勢のみなさんに混じらずに神輿の上で『絶対王者』的に余裕を持って座っている弦巻おじさんと、石柱の前で腕を組んで立っている北沢おじさんと若宮おじさん。

そしてお互いの雑兵達がぶつかり合った時、弦巻おじさんはニヤリと笑って片手を挙げる。

それを合図に風切り音を鳴らしながら一台の戦車が入ってくる。細長い先端に回転刃が装着され、馬が引くと思われる位置に氷川おじさんと花園おじさん。御者の位置に美咲の父親がいる。

「「……えぇぇ……」」

本気でドン引きした声が美咲と紗夜でハモる。なんというか学校の一競技にそこまでやるかという声だ。

『おぉっと!! ここで白組に戦車の登場だぁぁ!! 汚い!! 流石弦巻汚い!!』

「我がルールである!!!」
牛込おじさんの実況に力強く叫ぶ弦巻おじさん。やっていることは最悪である。
『うぅむ、あれはまさか』
『知っているのか戸山!!』
『うむ。あれは映画バーフバリに出てきたバラーラデーヴァが乗っていたびっくりどっきりバラーラデーヴァ号。しかも1号機!!』
『わざわざ映画の戦車を作るとかマジでドン引きだぞ弦巻!!』
牛込おじさんの声を笑い飛ばす弦巻おじさん。しかし、その強さは絶大だった。バラーラデーヴァ号は並み居る雑兵達を回転刃（マジ刃じゃなく流石にスポンジっぽい）で弾き飛ばし、北沢おじさんと若宮おじさんに向かっていく。
前に出ようとした若宮おじさんを北沢おじさんは止める。そして重さの単位はトンであろう石柱を片手で持ち上げた。
「……なぁ、奥沢さん。私は幻覚を見てるんだよな」
「ところがどっこい現実です……!!」
「なんであれを片手で持ち上げられるんだ!!」
有咲魂の咆哮である。だが北沢おじさんにはできてしまうのだから仕方ない。
そして北沢おじさんはそれを白組が用意したバラーラデーヴァ号に向かって振り下ろす。グシャぁっといい音を立てて哀れバラーラデーヴァ号が潰されてしまう。ショッギョムッジョ。美咲の父親と氷川おじさん、花園おじさんは素早く脱出している。それに舌打ちが漏れたのは美咲と紗夜の二人だ。一緒に潰れて仕舞えば心労が減ったのに。
石柱が地面に倒れたら負けなので北沢おじさんも地面につくギリギリで石柱を止め、元の位置に戻す。
「ふむ、流石は戦闘民族北沢である。よかろう、奥沢、氷川、花園!!
相手は二人だ!! 倒してしまうがいい!!」
「氷川!! 花園!! ジェットストリームアタックをかけるぞ!!」
「「おう!!」」

弦巻おじさんの言葉にノリノリで乗っかる美咲の父親、氷川おじさん、花園おじさんの三人。三人縦列になって北沢おじさんに向かって走る。
「死ね」
その一言と共に三人組に逆刃刀で斬りかかる若宮おじさん。それによってジェットストリームフォーメーションは崩される。
「今回こそ貴様に勝つぞ、氷川」
「相変わらずしつこいな、若宮」
そして始まる氷川おじさんと若宮おじさんの一騎討ち。三本同時に斬撃が出たり衝撃波が出たりのビックリ人間ショーが始まっている。
そして北沢おじさんの相手を美咲の父親と花園おじさんがやっている。地面を抉る四股をジャンプで回避し、抉れた地面を蹴り飛ばして攻撃する美咲の父親。素早く北沢おじさんの背後に回り込み八極拳の拳を叩き込む花園おじさん。
しかし北沢おじさんはそれを避けずに受け止める。およそ人体から出てはいけない音をたてながらも北沢おじさんは平然としている。
『さぁ、予想通りの人外対決になってまいりました。解説の戸山はどう思われますか?』
『あいつらは自重という言葉を知った方がいい』
『香澄ちゃんと明日香ちゃんのことになると自重を忘れる人間のセリフじゃないな』
『はぁ!!　香澄と明日香は世界一可愛いから!!』
『はぁ!?　世界一可愛いのはうちのゆりとりみだから!!』
そしてどうでもいいところで始まる場外乱闘。
「……紗夜さん、どうしましょうか?」
「……私に聞かないでください、美咲さん」
美咲と紗夜の呟きは歓声と悲鳴にかき消されるのであった。

父と求めて～モンスターハンター～

「美咲、美咲のハンバーグと私のパセリをトレードしない？」
「おたえはそのトレードを本気で受け入れられると思ってるの？」
美咲の言葉に本気で不思議そうに首を傾げるおたえ。それを見て美咲はこれだから天然は困ると思った。
今日はハロハピのメンバーとポピパのメンバーが一緒に昼食をとっている。理由？　香澄とこころが揃った。それだけで説明はつく。
「な、なあ、奥沢さん」
「なんですか？」
ついにトレードではなく略奪を仕掛けてきたおたえの箸を迎撃している美咲に、有咲が話しかけてくる。美咲とおたえのやりとりに軽くドン引きしているようだが、美咲的にはいい加減慣れて欲しいものである。
「お、奥沢さんってポピパのメンバーの父親全員と知り合いなんだよな？」
「ええ、まぁ。不本意ながら」
美咲に悪影響を与えたのはポピパのオヤジーズだけではない。ファッキンファーザーズ。
そこで有咲は覚悟を決めたように口を開く。
「奥沢さんは私の父親と会ったことあるのか？」
有咲の言葉に美咲は不思議になっておたえと顔を見合わせる。
「ありますけど」
「私もあるよ」
「おたえも!?」
美咲の言葉におたえも続くと有咲はマジ驚愕の声をあげる。そして美咲の肩を掴んでガックンガックン揺らし始めた。
「なんで娘の私が会ったことなくて友人の娘が会ったことあるんだ!?　おかしいだろ!?」
美咲も有咲の言葉に不思議になる。あの親バカの市ヶ谷おじさん

が有咲と会ったことがない？　それはおかしい。
「でも市ヶ谷おじさんは頻繁に市ヶ谷さんに会いに行ってるって言ってましたよ？」
「はぁ？　会ったことねぇぞ？」
なんということだ。ついに美咲の交友関係の中で数少ない常識人である有咲がやさぐれてしまった。
とりあえず後でオヤジーズに八つ当たりをすることを心に決めつつ話を進める。
「でも市ヶ谷おじさんは週５で会いに行ってるって言ってましたよ？」
「いや、来てねぇって」
「でもちゃんと『夢』にお邪魔してるって言ってましたけど」
「ちょっと待ってくれ」
美咲の言葉に頭痛が痛いポーズをとる有咲。どうやら現実を受け入れられないようだ。
「悪い、聞き間違えたみたいだからもう一回言ってくれるか？」
「『夢』にお邪魔して週５で会いに行ってるって言ってましたよ」
「おかしくねぇ!?」
何を今更。自分の父親だけまともだと思っていたのだろうか。美咲からしてみたら市ヶ谷おじさんはオヤジーズの中でもトップクラスの変人だ。
「待て待て待て、週５で夢に出てくるってまさか見た目高校生くらいの金髪のイケメンか？」
「あ、それですね」
「なんてこったぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!!!」
この世が憎いとばかりに地面を叩く有咲。美咲は有咲がそこまで絶望している理由がわからない。
するとおたえが思い出したようにポツリと呟いた。
「あれ？　そういえば有咲がポピパの罰ゲームで言っていた好きな人って夢に出てくるお兄さんだったような」
「おたえ！　言うなぁぁ!!」

美咲の有咲を見る視線が暖かくなる。まぁ、確かに市ヶ谷おじさんは白鷺おじさんとは別ベクトルのイケメンだ。思春期の女子学生なら惚れても仕方ない。
それが実父だと知ったら完全に黒歴史だが。
「おかしいだろ!?　なんで夢に出てこれるんだよ!?」
「市ヶ谷おじさんは仙人ですから」
「やめろぉぉぉ!!　これ以上ツッコミどころを増やすなぁぁぁぁぁ!!」
美咲の言葉に前衛芸術のような態勢になる有咲。するとおたえが何かに気づいたように手を叩いた。
「そっか、有咲はお父さんに会いたいんだね」
「は?　いや、会えるもんなら直接会って文句は言いたいけどよ」
有咲の言葉におたえの行動は早かった。
「美咲、私は紗夜さんと日菜さんに連絡とるね」
「それじゃあ私は大和おじさんに装置が使えるか確認とるよ」
「私はどこに連れて行かれるんだ!?」

「と言うわけで市ヶ谷おじさんがいる世界に転移したわけですけど、何か言いたそうですね市ヶ谷さん」
「私はどこに連れてこられたんだ!?」
「?　市ヶ谷おじさんがいる世界だよ?」
「そうじゃねぇんだよ、おたえ!!」
有咲渾身の叫びである。まぁ、美咲と紗夜は理解できなくもない。
「この山岳地帯はどこだ!?　明らかに地球じゃねぇよな!?　だってみたこともない生物もいるしよぉ!!」
「も〜、そんなちっちゃいこと気にしちゃルンとこないよ有咲ちゃん」
「日菜先輩はどういうことだ!?　つぅかなんで私らはこんなにゴッテゴッテの鎧をつけてておたえ達に至ってはバカデカイ武器持ってるの!?」

「流石にこの世界は素手で行くには危険が多いので」
「どう言うことですか紗夜先輩!?」
「単純に言うと超危険地帯ってことです」
「ヌヲォォォォォォォォ!!!!!!」
美咲の言葉に頭を掻き毟ろうとして兜が邪魔して掻き毟れなかった有咲。
「大丈夫ですよ。昨日のうちにお父さん達が危険なドラゴンは狩ってくれておいたはずなんで」
「待ってくれ、待ってくれよ奥沢さん。この世界にはドラゴンがいるのか?」
「? 普通にいるよ!!」
「おかしいだろ!!」
元気のいい日菜の言葉に世界はこんなことじゃないことばっかりだと叫ぶ有咲。
「ム」
「? どうかしましたか、紗夜さん」
状態異常・混乱にかかった有咲の相手をおたえに丸投げして、美咲は紗夜に近く。
「ちょっと止まっいてください」
それだけ言い残して紗夜は大岩の上に登って双眼鏡で何かをみている。そしてすぐに飛び降りてきた。
「まずいですね、進路上にリオレウスとリオレイアがいます」
「何が何やらわからないけど危険なんだな、引き返しましょう」
紗夜の言葉に食い気味にかぶせてくる有咲。しかし、非常識な父親に育てられた娘が常識人なわけないのだ!!
「あ、私閃光玉持ってきてるよ!!」
「それじゃあ日菜に閃光玉を投げてもらって速攻で手前にいるリオレイアを潰しましょう」
「一撃で潰すなら手数の多い私や紗夜さんじゃなくておたえですかね」
「任せて」

日菜の言葉に紗夜が冷静に作戦（と呼べるものではない）を立てると美咲が続く。すると太刀を持ったおたえは力強く頷いた。
「いやいや!!　大人しく帰ろうぜ!!」
「それじゃあ皆さん、一狩り行きましょう!!」
「「おぉ!!」」
「帰ろうぜぇ!!」
有咲の言葉は日菜の投げた閃光玉に掻き消されるのであった。

「死ぬかと思った……マジで死ぬかと思った……」
「？　市ヶ谷さんに危険はなかったはずだけど？」
「クソでかいドラゴンがこっちに突進してきたけど!?」
「それも日菜さんがハンマーで殴り飛ばしたじゃないですか」
前衛芸術のようになる有咲。どうやらｓａｎ値がピンチらしい。
「あ!!　天鱗出た!!」
「いいなぁ、日菜さん。私は重殻だけだ。紗夜さんはどうですか？」
「煌液が出ましたね」
「それで日菜さん達は何やってんの!?」
「素材の剥ぎ取りですよ」
「なんで奥沢さんはそんなに普通なんだ!?　私か!?　私がおかしいのか!?」
残念ながらこの場に限って言えばおかしいのは有咲である。
「まぁ、もうすぐ目的地ですから。みんなも剥ぎ取り終わったみたいだから行きましょうか」
それぞれ剥ぎ取った素材を持ち物袋に入れて（明らかにサイズを無視した袋への入り方に有咲は発狂した）から全員で歩き出す。
途中で襲撃してきたランボスの群は美咲が双剣で切り刻んだり紗夜が弓で纏めて撃ち抜いたり日菜がハンマーで押しつぶしたりおたえが太刀で一刀両断にしたりしたために大きな問題にはならなかった（当然のように有咲は発狂した）。
そして目的地に辿り着く。

「つきましたよ、有咲さん」
「あ!! 美咲ちゃん!! 私達は発掘してるね!!」
「つっこまねぇ……!! 絶対につっこまねぇからな……!!」
ツルハシ持って崖の方に行った氷川姉妹とおたえと見送りつつ美咲は有咲が可哀想になる。
早く現実を見ればいいのに、的な意味で。
有咲は大きく深呼吸してから真面目な表情になる。
「それで? 私の父親はどこにいるんだ?」
「あそこですよ」
有咲は美咲の指差した先を見てから一度目をよく揉んでからもう一度口を開く。
「それで? 私の父親はどこにいるんだ?」
「あそこですよ」
「羊の群れの上に宇宙服で寝ている奴しかいないぞ!?」
「市ヶ谷さんの目は正常ですね。羊の群れの上で寝ている宇宙服の人が市ヶ谷おじさんです」
「ヌォォォォォォォォォ!!!」
正確に言えば市ヶ谷おじさんが着ているのは宇宙服ではなく怠惰スーツ（非常に頑丈で冷暖房完備、さらには人工呼吸器も完備している）らしいが、詳しい説明をすると有咲が壊れると思って美咲は説明をやめた。
唸っていた有咲は突如、動きを止めると鬼気迫った表情で市ヶ谷おじさんに走り寄っていく。
そして勢いよくジャンプした。
「起きやがれクソ親父ぃぃぃぃぃぃ!!!」
そして思いっきり飛び蹴りを叩き込んだ。しかし、悲しいから氷川おじさんなどの人類をやめている人々からの一撃も完全防御の怠惰スーツである。人類の範疇である有咲の一撃ではヒビすら入らない。
モフモフの群れの中に落ちる有咲、どうなるかなぁと完全に他人事で見ている美咲。そしてツルハシで鉱物を掘り出している氷川姉妹とおたえ。

控えめに言ってカオスであった。
だが、ようやく怠惰スーツに動きがある。怠惰スーツの上に若い男性がホログラムで現れたのだ。
『ああ、めんどくさい考えたくない。なんだい有咲？　脳を働かせるのだったカロリーを消費するんだよ？』
「初めて会いに来た娘に対する第一声がそれか!?」
有咲の言葉に市ヶ谷おじさんは何やら考えていたが
「何を言ってるんだい？　週に5回は会ってるじゃないか」
「羊が喋った!?」
『自分の口で喋るのは面倒だから彼らの口を借りることにするよ』
「どこまで物臭なんだ!!」
驚愕の声を上げる有咲だが、美咲的に市ヶ谷おじさんが羊の口を借りてとは言え会話をしていることが驚きだ。なにせ市ヶ谷おじさんは店に来たとしてもホログラムな上に会話も面倒だと言って相手の脳内に直接語りかけてくるからだ。
「有咲とお母さんには悪いことをしているとは思っているんだ」
「え？　ちょっと待ってくれ？　私はマジで羊と会話しろって言うのか？」
「結論から言おう。有咲のお母さん……まぁ、私の妻だけど生きているよ」
「はぁ!?」
そして割と娘にとって爆弾発言をする市ヶ谷おじさん。
「ど、どこにいるんだ!?」
「仙人界」
「……は？」
「だから仙人界。会いたいのなら止めないけど頑張って行きなよ。まぁ、奥沢あたりに言えばどうにかしてくれるんじゃないかな」
「いやいやいや!!　私はまだ両親が仙人だったことをう受け入れきれていないんだよ!!」
「そのうち仙人界からスカウトが来ると思うから頑張ってね」
「待て待て待て!!　どう言うことだ!!」

有咲は必死になって喋っていた羊に詰め寄るが、羊は『メ～』と鳴くだけだ。
「……なぁ、奥沢さん」
「市ヶ谷おじさん、完全に寝たっぽいんで一ヶ月はホログラムも出てきませんよ」
「クソがぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!!」

娘達の戦い～あの父親を止めるために～

美咲は千聖と一緒にちょっと遠目のカフェに来ている。その理由も千聖が密談をしたいと言ったからだ。

ＣｉＲＣＬＥのカフェはバックに美咲の父親がついており密談には向かない。羽沢珈琲店は店長が自分の娘のこと以外は値段次第で平然と売るために密談できないのだ。

千聖は真剣な表情で美咲を見つめながら口を開く。

「美咲ちゃん」

「なんでしょう」

「どうやったら新Ｂｅａｒ　Ｗａｒｓの撮影を中止に追い込めるかしら」

「無理だと思いますよ」

「そこをなんとかしてほしいの!!」

哀れにもまだ千聖は親バカの呪縛から逃げられると思っているらしい。齢１０を前にして親バカから逃げることを諦めた美咲からしてみたら可哀想で仕方ない。

「もう撮影も始まっているんですから諦めた方がいいんじゃないですか」

美咲の言葉に千聖の視線も店舗に付けられているテレビ画面に向かう。

『新Ｂｅａｒ　Ｗａｒｓ撮影順調!!』と言うＣＭが流れていた。主演の部分にはバッチリ白鷺千聖の名前がある。

それをみて頭を抱える千聖。出演と言ってもバンドの一員としてだけなので完全に対岸の火事を決め込む美咲。

「わ、私が大きな不祥事を起こせば……」

「あのオヤジーズに揉み消せないことがあるとでも?」

政界に美咲の父親、経済界にこころの父親、芸能界にはひまりの父親と千聖の父親。

千聖はその事実に机に蹲って頭を抱える。

「なんであのオヤジーズは無駄に権力を持ってるの……!!」

「一人だけでもウザいのにそれが複数ですからねぇ」
一人ずつでも厄介なのにそれが１０人以上。それが全員親バカと言う最悪っぷり。
「美咲ちゃん、昔からあの人達に振り回されているんでしょ？　何かいい対処法ないの？」
「ないですねぇ」
千聖の願いをアイスコーヒーをチューっと吸いながら切り捨てる美咲。それをジト目でみる千聖。
「美咲ちゃん、何か他人事みたいね」
「いえ、実際他人事ですし」
「そう、美咲ちゃんはそういうことを言うのね」
千聖はそう言ってからスマホを取り出して何事か打ち込み始めた。美咲は不思議そうにそれをみているが、千聖が打ち込み終わったのか美咲に画面を見せて来た。
「なぁ!?」
そこには『美咲ちゃんがミッシェルとして新Ｂｅａｒ　Ｗａｒｓに出たいと言ってるわ』と言う言葉が!!
美咲は慌てた様子で千聖のスマホを奪い取るが、千聖は優雅にコーヒーを楽しみながら口を開いた。
「残念ながら送信済みよ」
「ファッキンオヤジーズ!!」
すでにそには既読マークがついていた。娘からの連絡を素早く見過ぎだろう。
そして千聖はコーヒーカップを置きながら誰もが見惚れるような笑顔を浮かべて口を開く。
「さぁ、美咲ちゃん。一緒にあの作品を潰す方法を考えましょう？」
「あんた最悪だな……!!」
しかし、この連絡が千聖の父親の頭の中に入った時点で美咲の出演は決まったようなものだろう。
ならばどうやってあのクソ映画を潰すか考えた方が建設的だろう。
「事故を装って白鷺おじさんに死んでもらうのはどうですか？」

「やり方が問題ね。私が言うのもなんだけどあの親父なかなか死なないわよ」
「……美咲さん、何怖い会話をしているんですか？」
完全にダークサイドに落ちた会話を始めた美咲と千聖に話しかけてくる女勇者が一名。美咲が顔をあげると見覚えのある後輩の顔。
「あれ？　るいるい、久しぶりだね」
「るいるいではなく瑠唯です」
近隣でも有名な月ノ森女学園の制服を着た女子学生がクールな表情を崩すことなくツッコミを入れてくる。
それに千聖は首を傾げた。
「美咲ちゃんの知り合いかしら？」
「中学時代の後輩です」
「え？　美咲ちゃん、元々月ノ森生だったの？」
「ヒント：うちの父親が月ノ森の理事長」
「あ（察し）」
美咲の父親が理事長のせいで美咲と妹の久留里は問答無用で月ノ森に放り込まれた。理事長の娘というだけでも周囲からのやっかみは高いが、父親はさらに爆弾を投下する。美咲と久留里を理事会の役員にしてしまったのだ。
当然のように生徒どころか教師からも腫れ物を扱うように扱われた美咲は父親の呪縛から逃げるために高校受験をして成功した。
問題だったのは変なところで真面目な美咲が真面目に月ノ森の理事会の役員の仕事をこなしたところ生徒達から多大な支持を受けてしまったことだろうか。そのせいで現在通っている久留里も苦労しているのは本気で土下座案件であった。
「美咲先輩と……すいません、そちらの方は？」
瑠唯が知らなかったことで千聖が軽いショックを受けているが、大人しく自己紹介をする。
そして美咲は瑠唯も同じテーブルに座らせる。それに千聖は不思議そうに首を傾げる。今は邪智暴虐なるオヤジーズに正義の鉄槌を下すべく勇者娘が作戦会議をしているところだ。そんなところに一

般人を入れていいのだろうか。
そんな千聖を見て美咲は力強く頷く。
「るいるいは私達の味方です」
「瑠唯ちゃん、お父さんのことどう思う？」
「死んで欲しいとまではいきませんが都合よく行方不明になって欲しいです」
千聖の言葉にクールな表情を一切崩さずに嫌悪感丸出しで言葉を吐き出す瑠唯。それを聞いて千聖は瑠唯と固い握手をした。
そして美咲と千聖は現状を瑠唯に説明する。それを聞いて瑠唯はクールな表情を崩さず、だが少しだけ表情を顰めた。
「刑事事件を起こすことはオススメできません」
「？　何故かしら？」
瑠唯の言葉に千聖が首を捻るが、美咲はすぐに思いつく。
「あ、そっか。八潮のおじさんは……」
「はい、警視総監をやっています。刑事事件を起こしても即座に握り潰されるかと」
「本当になんであのオヤジーズは無駄に権力を持ってるの……!!」
千聖魂の恨み節である。だが仕方ない。オヤジーズは学生時代に『世界を俺達の手中に収めよう』と約束していたのだ。そして着実にそれは実行されつつある。
そんなオヤジーズの野望を唯一知っている勇者・ミサキは巻き込まれたくないのでその話は聞かなかったことにした。
「おやぁ？　千聖ちゃんに美咲ちゃん、それに瑠唯ちゃんなんて珍しい顔ぶれだねぇ」
そこに妙に間延びした話かたをした中年の男性が声をかけてくる。ボッサボサの髪に伸び放題の髭、そして目の下の濃い隈は完全に不審者で、そんな不審者が見た目麗しい若い娘に声かけとか完全にポリス案件だったが、ポリスを呼ばれることはない。
「瀬田おじさま」
「瀬田おじさん」
「瀬田さん」

上から順番に千聖、美咲、瑠唯である。ちなみに瑠唯は頻繁に父親に連れられて美咲の父親がやっている居酒屋に来るためにオヤジーズの大部分を知り合いである。
「〆切は大丈夫なんですか？」
「ははは、会って早々に〆切の心配なんて千聖ちゃんはできた娘だなぁ」
薫パッパの仕事は小説家である。しかも出す本出す本がバカ売れしてノーベル文学賞も受賞したことのある文豪である。
「瀬田おじさん、薫さんにキチンと言葉の意味を教えた方がいいですよ」
「うぅん、薫にはいつも『言葉だけを覚えずに意味も覚えなさい』って教えているんだけどなぁ」
そして薫がよく言う詩的な言い回しやシェイクスピアの名言は主に薫パッパの小説の資料が出典元である。だが、薫はとてもじゃないがそれを理解しているとは思えない。
だが薫パッパは伸びきった髭を擦りながら嬉しそうに口を開く。
「でもそんな薫がとても可愛いよねぇ」
「美咲さん、親バカの波動を感じました。この不審者にコーヒーをぶっかけていいですか？」
「るいるい、やるだけ無駄だからやめとこう」
全員の白けきった視線を受けながら『ごめんごめん』と笑いながら同じ席に着く薫パパ。
「それで？　何かあったかぁい？　おじさんは鉄火場には出られないけど相談にのることくらいはできるよぉ」
この言葉からわかる通り薫パッパは常識人よりの非常識人だ。そこで千聖は邪智暴虐なる千聖パッパの所業を語る。薫パッパと千聖パッパは幼馴染のために関係を気安い。
「あ～、白鷺から突然ストーリーの変更要求が来たのはそう言うことかぁ」
「あのクソ親父……!!」
どうやらストーリー原案の薫パッパのところに千聖パッパは速攻

で連絡を取ったらしい。その事実を知った千聖から女優から漏れてはいけない言葉が漏れているが美咲と瑠唯は聞かなかったことにした。

「そ、それで瀬田おじさん。その原稿は書いていないですよね？」

これで瀬田おじさんが書いていなければ話は簡単だ。瀬田おじさんの腕をへし折って原稿を書けなくしてしまえばいいだけである。

そんな不穏なことを考えている美咲の心など知らずに薫パッパは苦笑しながら口を開く。

「ごめんねぇ、筆が乗っちゃったからもう送っちゃったんだぁ」

その言葉に美咲と千聖は机に沈むのであった。